

標準語と新方言の地域差・年齢差
——庄内グロットグラムの計量的分析——

**Regional and Age Differences
of Standard Language and New Dialect
—A Quantitative Analysis of the Shonai Glottogram —**

井上 史雄

東京外国語大学名誉教授

INOUE Fumio

Professor Emeritus Tokyo University of Foreign Studies

- 1 庄内グロットグラム調査
 - 1.1 庄内グロットグラムの調査地点
 - 1.2 庄内グロットグラムの「クレル」
- 2 新方言形のグロットグラム
 - 2.0 「新方言」の定義
 - 2.1 庄内新方言の位置
 - 2.2 新方言「ケル」のグロットグラム
 - 2.3 新方言 14 項目のグロットグラム
 - 2.4 「いじめ」(育児籠)の新方言
 - 2.5 新方言形使用率の総合グロットグラム
 - 2.6 新方言形の地点差
- 3 標準語形のグロットグラム
 - 3.1 標準語形「クレル」のグロットグラム
 - 3.2 標準語個別グロットグラム
 - 3.3 標準語形使用率のグロットグラム
 - 3.4 標準語形の地点差
- 4 庄内の新方言形と標準語形 8km 内
 - 4.1 城下町鶴岡と等高線・等語線
 - 4.2 標準語と新方言の中心部での折り畳み
 - 4.3 新方言形・標準語形の地域差 8km 内
 - 4.4 年齢による違い
 - 4.5 年齢と地域の違い
 - 4.6 新方言形・標準語形の年齢差
- 5 庄内の新方言と標準語の伝播過程
 - 5.1 標準語と新方言の普及の 2 つのパターン
 - 5.2 普及の年速
 - 5.3 地理的・社会的距離
- 6 二重雨傘モデル
 - 6.1 雨傘モデル
 - 6.2 地理的・社会的方言
 - 6.3 結論

キーワード：グロットグラム 新方言 標準語 見かけ時間 二重雨傘モデル

Keywords: Glottogram, New dialect, Standard language, apparent time, double umbrella model



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿では山形県庄内地方の南北を貫くグロットグラム調査の結果を分析する。共通語化とそれに見逆行する新方言に着目して、多数項目を計量的に扱って、変化と伝播の様相を探る。地域差については、新方言も標準語形も、鶴岡市と酒田市が伝播の中心であり、南端や東の山間部や北端は、鶴岡市のことばの影響の少ない地域であることが分かった。一方年齢差を見ると、新方言も標準語も若年層に多い。総合的にグラフ化し、都市と農村のことばの違いを、具体的に確認できた。日本全体の伝播を考えると、地方都市は中央のことばを受け入れる中間段階の役を果たすと考えられ、「二重雨傘モデル」を設定することができる。

Abstract

This paper analyzes the results of a glottogram survey that runs through the Shonai region of Yamagata Prefecture from north to south. Focusing on the standardization and the new dialects that seemingly run counter to it, a large number of items are treated quantitatively to explore the aspects of change and propagation. Geographically, it was found that Tsuruoka City and Sakata City were the center of propagation for both the new dialect and the standard form. The southern mountainous area and the northern end of the region are areas where the influence of the language of Tsuruoka City is minimal. On the other hand, age differences show that both the new dialect and the standard language are more common among the younger generation. We were able to concretely confirm the differences in the language between the medium-sized cities and rural areas. Considering the propagation in Japan as a whole, local cities can be considered to play the role of an intermediate stage that accepts the new language changes, and a "double umbrella model" can be created.

1. 庄内グロットグラム調査

山形県庄内地方では、戦後まもなく国立国語研究所の企画として共通語化の実地調査が行われた。その後鶴岡市周辺の方言調査も行われたので、両方の結果を照合することによって、地方中都市と農村とのことばの違いが分かる。以下ではこの地域のグロットグラム調査によって、まず新方言の分布と変化について、次に標準語形の分布と変化について、述べる。これにより、国立国語研究所の鶴岡共通語化調査（国立国語研究所 2007）をより広い理論的背景の中に位置づけることができる。理論的問題については、本稿末尾で述べる。

1. 1. 庄内グロットグラムの調査地点

1974年から1979年にかけて、山形県庄内地方を南北に貫く形でグロットグラム glottogram（地理×年齢図）調査が行われた¹⁾。図 1-1 に地域の概略を示す。この地域は左側の大きな衛星地図に

1) その後グロットグラム調査は発展し、全国に広がった。

表示されている。青い吹き出しは鶴岡城址を示す。鶴岡市域（旧市内）の赤丸は、6.2節で述べる地方都市とその周辺の仮想等高線（図 5-3）に対応する。右側の図の線は調査地点を示しており、南から北への幹線道路沿いに位置している。大きな赤い矢印は、この論文第 4 節で再分析を行う地域を示している。

調査地域地図は井上（2000:164）にもある。これまで個々の単語についての考察があったが（井上 1985、2000、2001、2003）、多くの図の全体傾向をみたところ、新たな現象が読み取れた。

従来のグロットグラムでは、地理的位置（地点間の距離）や話者の年齢が大まかなもので、忠実に反映しなかった。その改良を目指し、エクセル散布図機能を活用して、地理と年齢を忠実に図示した。初期の分析作業として鶴岡旧市内から南北約 12 km（3 里）の 15 集落のデータを分析に利用した（井上 2014）。買物を鶴岡に頼る範囲にあたる。新方言 16 語と標準語形 20 語の使われ方を見た。個々の語形の分布のほか、一般的な分布パターンをとらえるために、一人一人の使用語合計を計算して図化した。第 4 節で詳しく述べる。

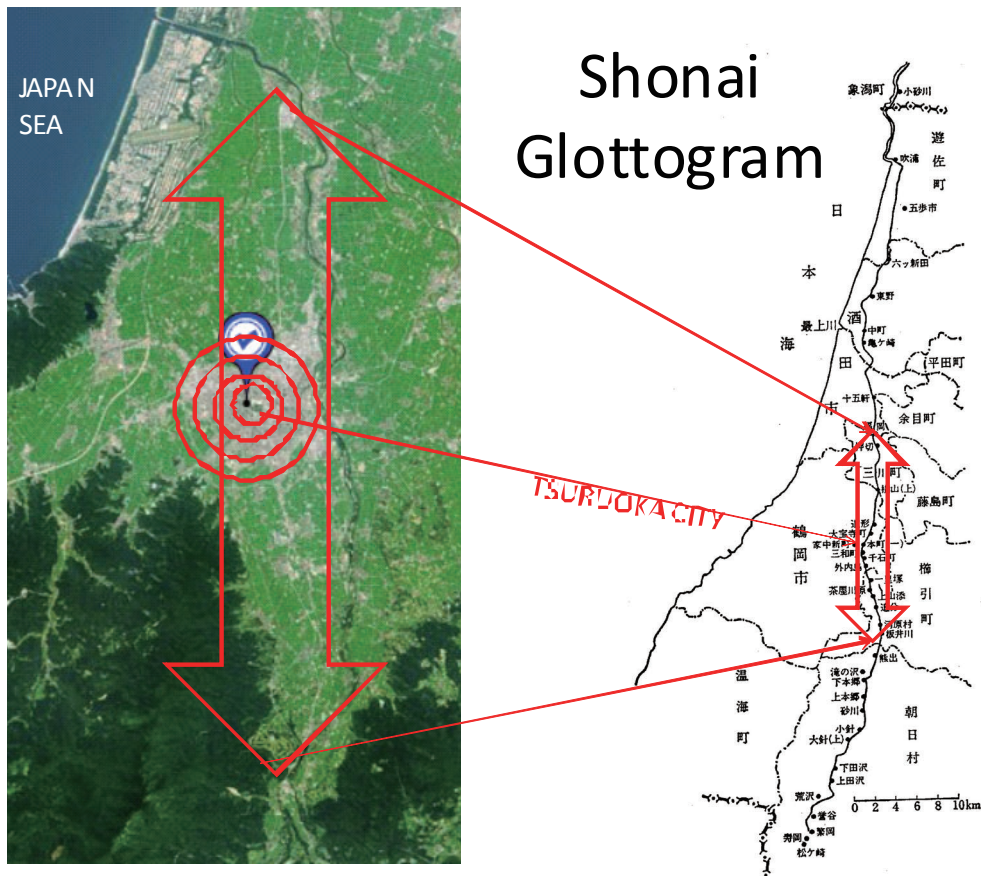


図 1-1 庄内地方調査地域図
Localities surveyed in Shonai district

1. 2. 庄内グロットグラムの「ケレル」

普通のグロットグラムは、地域差と²⁾、70年ほどの年齢差=見かけ時間 apparent time を示す(Labov 1972)。図 1-2 に見本を示す。南から北への1線上の地点は、左から右に水平に配置される。上下に話者が年齢に従って配される。下が若者(10代、1960年前後生まれ)、上が高齢者(80代、1900年以前生まれ)である。

図 1-2 のグロットグラムで示された語は、「ケレル」(標準語の「与える」にあたる)である³⁾。グロットグラム研究の初期の目的が、主に方言分布パターンを探ることだったので、標準語形の「ケレル」は目立たない小さい点で示した。方言形は、縮約された形「クエル」と「ケル」である。「ケル」は新方言として注目すべきなので、大きい四角形にして、若い話者の使用の多さを示した。

Shonai Glottogram (kureru > keru)

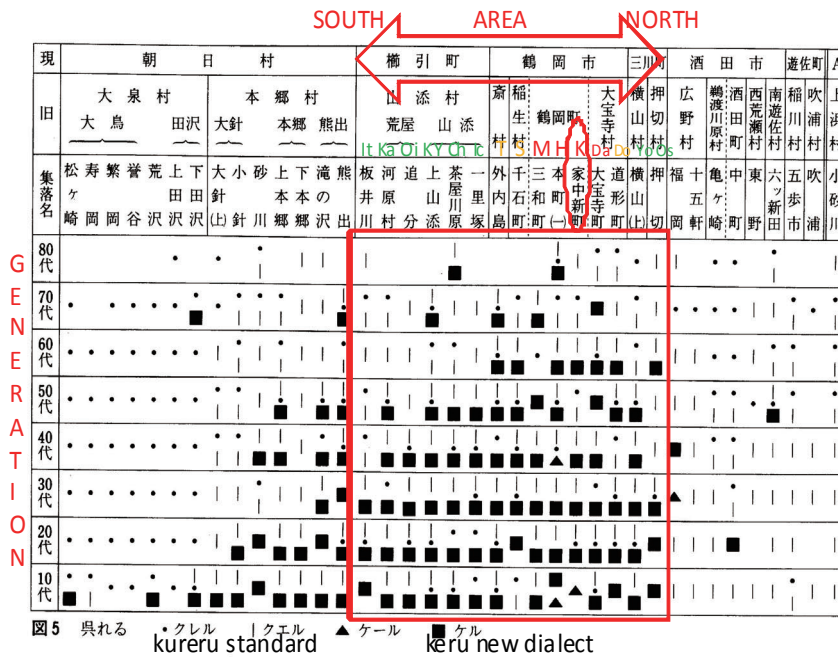


図5 呉れる ●ケレル |クエル ▲ケール ■ケル
 kureru standard keru new dialect

図 1-2 庄内グロットグラム原図「くれる」
 Original Shonai Glottogram

図 1-2 のグロットグラムは、地点間の地理的距離と話者の実際の年齢を忠実に示さないという意味で、誤解をまねく。図 2-2、図 3-2 以下にエクセルの散布図の技法によって、距離と年齢を忠

- 2) 言語地理学における「地理は歴史を反映し、空間は時間を反映する」というグロータース Grootaers のテーゼを発展させて (Inoue 2011), 「空間時間」と呼べる (井上 2015), 「記憶時間」も活用できる (井上 2015, 井上他 2022.1, Inoue et al. 2022.12)。
- 3) この地方では「与える」についてヤルとケレルにあたる方向性の区別を持たない (井上 2022)。ここでは語形の変遷を論じるので、意味の差を無視する。なお調査当時の若い世代も方向性の区別を、方言を話すときには意識していなかった。

実に示し、かつ個別の語形に分解して図化する。スペースをとるが、見やすく、読み取りやすいので、コストパフォーマンスは高い。図 1-2 の赤い四角は、本稿第 4 節で細分析する地域を示している⁴⁾。

2. 新方言形のグロットグラム

2.0. 「新方言」の定義

第 2 節では新方言を再分析する⁵⁾。今でも若い人が新しい方言形を使い始めている。言語史上、長い間常に起こってきた変化を、今も眼前で、手に取るように観察できる。

「新方言」は、3 条件により定義される (井上 1985)。(1) 非標準的な語形であること、(2) 若年層に多く使用されていること、(3) インフォーマルな場面で多く使用されていること、の 3 つの条件である。つまり、典型的な進行中の言語変化であり、継続的な下からの変化である (Labov 1994; Inoue 1993, 1999)。

日本の方言学における「新方言」の定義は、Trudgill (1992, 2004) が扱う英語方言学の *new dialect formation* とは異なっている。日本では、「新方言」は新しく生まれた語形に対して使われ、個々の言語的变化を意味し、語形 (または現象) を数えることができる。一方、英語の新方言は、植民地言語や都市言語など、全体として新しい言語体系を意味する。

2.1. 庄内新方言の位置

ここで分析する新方言の 14 語は、ケル (呉れる)、オモセ (面白い)、「ワガネ」(分からない) などである⁶⁾。新方言は全国各地で報告されており、現段階ではどの地域でも 10 項目以上はあると思われるが、実地調査によって使用状況が確認されることはまれだった。庄内では 1 地域の新方言 14 項目がグロットグラムで確認されたので、そのすべてを以下のように総合処理した。なお共通語形 (標準語形) は多くの項目で確認されるはずだが⁷⁾、1970 年代の山形県庄内地方の (筆者自身の母語である庄内方言を用いての) 面接調査では、若い世代でもほとんど現れなかった。その

4) 今回、再分析の対象となるのは 14 地点である。これらは、鶴岡市街地 (赤文字の地点) から南北 12km 以内に位置し、方言的に鶴岡の影響下にあることから選択されたものである。赤い K の字の地点は旧武家屋敷家中新町で、この地域全体の文化の中心であると推測される。オレンジ色の文字は郊外 (昭和の合併前のいわゆる鶴岡旧市内)、緑色の文字は農村部 (在郷) である。

5) この論文で扱った庄内新方言形・標準語形は、既発表のグロットグラムから個々に判定しつつ採用したものである (井上 1985, 2000, 2001)。初期の分析では 16 語の新方言を用いた (Inoue 2016)。その後 15 語に減らした。16 語のうちのクシャウ (こしらえる) は鶴岡市内の分布パターンからみると新方言だが、古い方言集に記録されていることから、今回は除いた。辺境から中心への新方言逆流の例で、下北のモチヨカリで早くに指摘されているし (井上 2000)、東京新方言でも多数例が確認されている。庄内全体で見ると省いたのは、この 1 語の逆流のために全体の分布パターンがゆがむことを恐れたためである。

6) イジメコ (嬰兒箆) オセル (教える) オモシエツケ (面白かった) オモセ (面白い) カエダ (枯れた) ケル (くれる) セ (しろ) ツエデ (連れて) テカ (凍雪) デゴ (ひたい) トライダ (取られた) トライネ (取られない) ヨゴセ (よこせ) ワガン (わから(ない)) ワスエネ (わすれない)

7) 共通語と標準語は、術語として区別される。しかし現実に起きている方言の衰退との関係では、戦後使われた「共通語化」以外に、「標準語化」があり、「東京語化」もある (井上 2011)。本稿では文脈によって使い分ける。

ため、本稿の共通語形 20 語も、出版された図から得られた情報としては多いほうと言える。

言語地理学における考察は往々にして個別的 atomistic だったが、多変量解析などを適用して、地理的分布パターン全体を大きくとらえる計量方言学的研究 dialectometry が発展した (Heeringa 2022)。本稿もその方向を目指すものである。

2.2. 新方言「ケル」のグロットグラム

図 2-1 に庄内グロットグラムの新方言形「ケル」単独の分布を示す。上下の軸は話者の生れた年を西暦で忠実に示す。左右の軸の地点の位置は、実際の地理的距離を忠実に反映する (図上部の 0 から 85 までの数字は調査地域南端大鳥からの道路距離 km を示す)。図下端に調査地点番号と地点名を添える。鶴岡旧市内では市内の言語差を確認するために多くの地点で調べたので密集しているが、その北ではほぼ 5km おきに調べたのでまばらである。

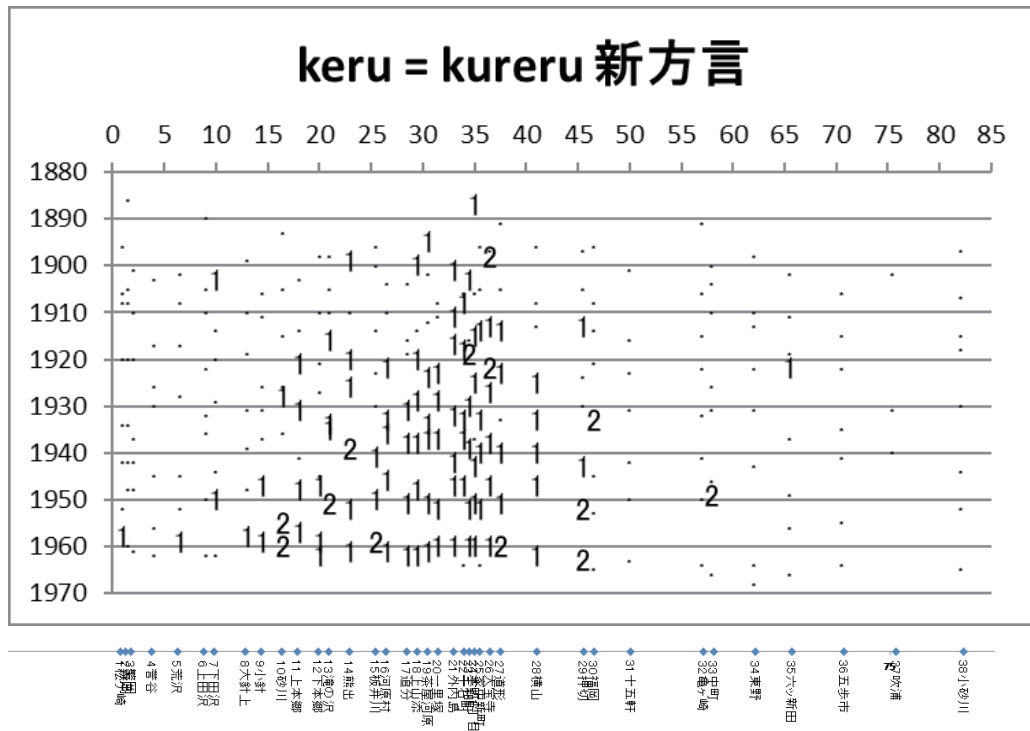


図 2-1 新方言「ケル」のグロットグラム
 glotto-gram of new dialect “keru”

- 2 新方言「ケル」だけが使われる
- 1 新方言とともに標準語形が使われる
- ハイフンは使用0

このグロットグラムを作るために、エクセルの散布図機能を利用した。地点の (南端の調査地点、大鳥からの) 道路距離、および個々の話者の誕生年のデータを計算することによって、忠実なグロットグラムが新たに描かれた。分布を視覚的に示すために (図 2-1 のように数値を入れたり、図 2-7 のように記号を入れたりするために)、「XY チャートラベラー」のアドイン・ソフトを

ダウンロードした⁸⁾。図中の2は新方言「ケル」だけが使われることを、1は新方言とともに標準語形が使われることを示す。ハイフンは使用0を示す。新方言「ケル」はピラミッド型の分布を示し、鶴岡市中心部では高年層以下が使い、その近くでは中年以下が使い、さらに遠方では若年層のみが使う。小規模な圏論的分布を示す。

2.3. 新方言14項目のグロットグラム

個別グロットグラムは全項目の各語形について作図できる。新方言14項目がグロットグラムで確認された⁹⁾。図2-2、図2-3に全体としての分布率の小さい語形から順に掲げる¹⁰⁾。左側が分布の少ない語形である。分布パターンは多様で、新方言が発生し普及するパターンが一律でないことを示す。ただし、鶴岡市中心部に分布するものと、南(左)の山間部に分布するものが目につく。山間部では「セ」の発音が一足早くシェ [je] からセ [se] に変化したためである。以下に、順に解説する。

2.3.1. トライネ

「取られない」(取れない=可能表現の否定)で、reのr脱落によりeになったが、前の母音aとつながったaeが音節の単純化によってaiになったもの。鶴岡旧市内の若い人のみ。

2.3.2. カエダ

「枯れた」のr脱落による語形kaeda。高年層に多いので、かつての音韻変化による古形の可能性があるが、以下の「連れて」などと同列に、新方言として扱った。

2.3.3. デゴ

「おでこ、出額」。酒田付近から散発的に広がったと考えられる。

2.3.4. (オモシェ) ッケ

「面白かった」の形容詞過去表現が「ッケ」になるのは、広く起こった(渋谷1994)。鶴岡周辺の若年層に多いが、内陸地方から流入した可能性がある。

2.3.5. オモセ

「面白い」の語形変化による新方言。オモシェのシェ [je] が古い発音で、高年層に多かったが、平野部の若年層は共通語の新しい発音セ [se] も習得し、方言形にも適用してオモセ [omose] に変えた。

2.3.6. ワスレネ

「忘れない」のaiが[e:]を経て短音化により[e]に変わった。音韻・文法の変化で適用される類例は多い。図の右端、秋田県の南端では全年齢層で使う。なお鶴岡周辺の若年層と中年以上はr脱落によりワシェネ、ワスエネになる。

8) ワードのバージョンアップによって、散布図にラベルが付くようになった。

9) 後述のように、初期には15項目を扱ったが、トライダ(取られた)を削除した。トライネ(取られない)と分布がよく似ているので、全体のパターンが崩れることを恐れた。

10) ただし鶴岡旧市内は地点密度が高く、庄内地方北半は密度が低いので、全体としての順番は、鶴岡市内の順番に左右される。

2. 3. 7. ツエデ

「連れて」のr脱落による語形。各地の高年層にもあるが、鶴岡周辺の若年層に広がっている、確実な新方言。

2. 3. 8. ヨゴセ

「寄越せ」のセが古音のシェ [je] からセ [se] に変わったための語形。南端の大鳥では古くからセ [se] だった。鶴岡周辺の若年層に広がっていた。

2. 3. 9. イジメコ

「イジメコ」育児籠は、新方言として広がっている。酒田と鶴岡に密に広がった。2.4 で詳説する。

2. 3. 10. オセル

「教える」はかつてオシエルに変化した。そのシェ [je] をセ [se] に変えることによって生じた新方言。いち早くセ音を採用した南部では高年層にも使われるが、鶴岡周辺の若年層にも広がっている。

2. 3. 11. セ

「する」の命令形はかつてシェ [je] だった。それをセ [se] に変えて生じた新方言。いち早くセ音を採用した南部では高年層にも使われるが、鶴岡南郊の若年層にも広がり、酒田付近にも広がった。

2. 3. 12. テカ

「凍雪」(圧雪、固くこおった雪道)。『浜荻』(井上 2000) に記されているように、江戸時代にはキンカだった。酒田の高年層は恐らくオノマトベに基づくテカを採用した。鶴岡周辺の若年層に広がっている。

2. 3. 13. ケル

「くれる」はr脱落によりクエルに変化し、さらにケルに変化した。東北方言に広がっている語形を採用したことになる。図 2-1 ですすでに扱ったように、鶴岡周辺に広がっている。

2. 3. 14. ワガンネ

「分からない」はr脱落によりワガンネに変化し、さらにワガネに変化した。南端には及ばなかった。庄内地方全体の高年層以下に広く普及している。内陸地方からの伝播の可能性もある。

2. 3. 15. 新方言のまとめ

新方言形について、まとめる。単語ごとの違いが目立つが、普及率順に並べると傾向が見える。新方言の普及過程は単純ではない。しかし鶴岡から広がっているものと、他のパターンを示すものがある。例えば、標準語の「オモシロカッタ」は、鶴岡市周辺の若い話者によって「オモシレーツケ」と表現される。しかし、その分布は散発的である。もう一つのパターンの新方言は、「枯れた」の意味の「カレタ」の変化形である「カレダ」だが、この語形は、ほとんど使われていない。若者間で散発的に使われている「カエダ」は、r脱落という古い音変化の復活である可能性がある。

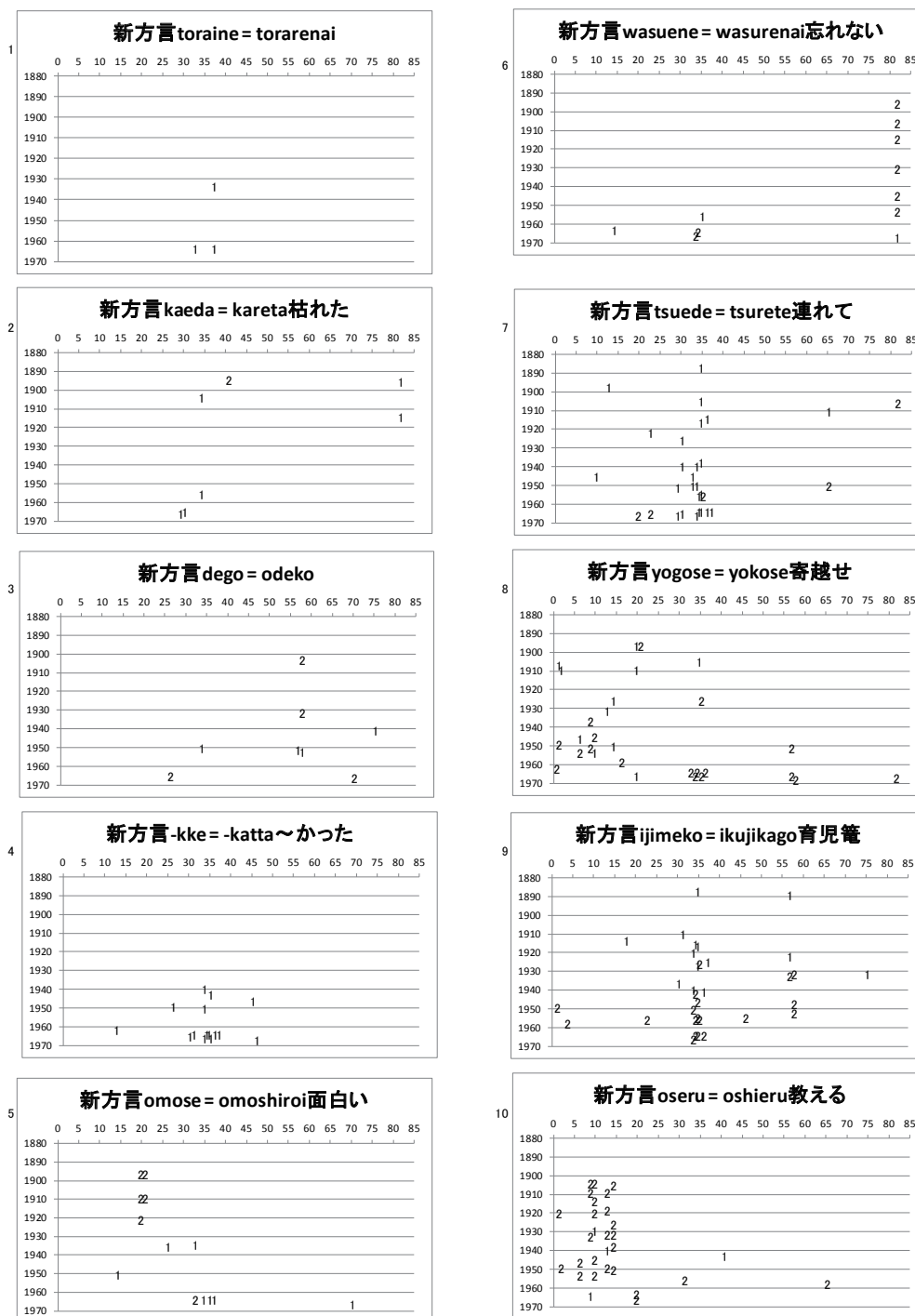


図 2-2 新方言 10 項目のグロットグラム
glottogram of ten new dialects

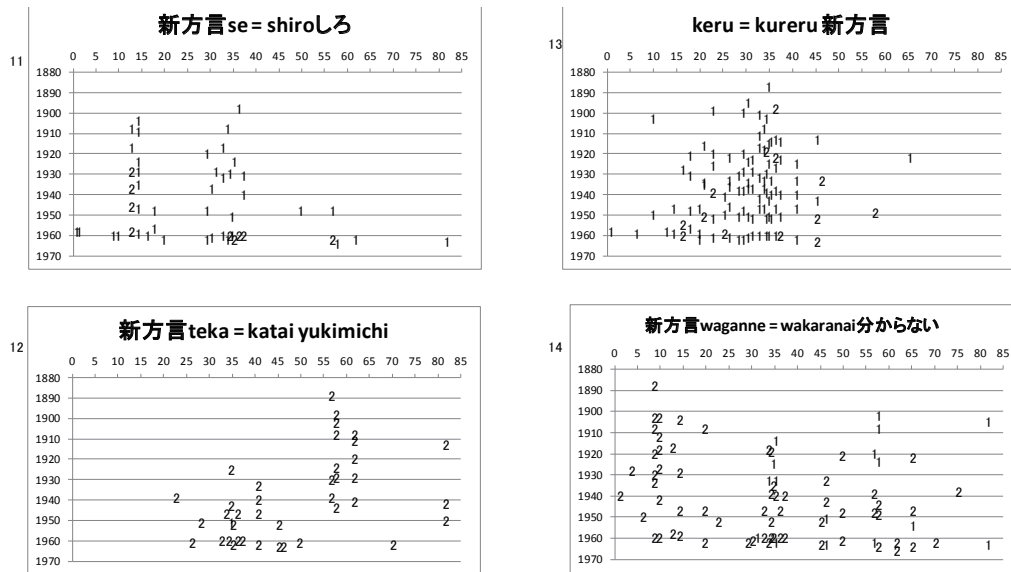


図 2-3 新方言 4 項目のグロットグラム
glottogram of four new dialects

2. 4. 「いじめ」(育児籠)の新方言

2-3-9 節、図 2-2 No.9 に掲げた「いじめ」(育児籠)については、他の資料を参照すると、新方言として広く位置付けられる。まず図 2-4 により、全国的な位置を見る(祖父江他 1957)。ほぼ日本海側と中部以北に実物が分布し、その名称には細かい地域差がある。

中部地方の分布を見ると、大きな点で示された izumi が縦線の tsugura に分断されたと、言語地理学の知見に基づいて読み取れる。つまり izumi は古い。一方東北地方を見ると、小さな点で示された ejiko の領域に、秋田の izumi があり、上陸したとも読み取れるが、海沿いに古形が残存したとも読み取れる。近畿には多様な語形が分布しているが、後世生み出されたものだろう。

Ejiko と izumi の対立は、庄内地方にも見られる。以下では大文字で語形を表示する。ヨーロッパの言語地理学で使われ、『日本言語地図』LAJ でも採用された表示で、細かい発音や語形の差を無視して、「～系」というような大きいまとめ方を表す。東北の音韻体系(歴史的な音韻融合・単純化)のために、「いじめ」については特に有効・必要である¹¹⁾。

庄内地方の分布を見る前に山形県内の分布をまとめる。『山形県方言辞典』(山形県方言研究会 1970)によれば、IZIKO 系は内陸地方すべてを覆い、庄内地方にも分布する。IZIME 系と IZIMI 系は庄内地方のみに分布する。

また『秋田のことば』(秋田県教育委員会 2000)では、「えんじめ」EZIME と「えんちこ」ENCIKO が立項され¹²⁾、「えんじめ」のほうが全県的に分布する。IZIME 系は山形県と秋田県の海岸部に、流入したとも、残存したとも読み取れる。

11) 東北方言の大部分では、語頭のイ i とエ e の区別が失われた。またシス、チツ、ジズなどの区別も失われた(井上 2000)。EZIKO の -KO は指小辞であり、語中のカタ行子音有声化が作用しない。-ZIKO のように濁音(ガザダバ行のイウ段という狭い母音)のあとに無声の K (や T) などが続く場合には、濁音が無声化し、入り渡り鼻音が残って「～ンチコ」のようになる。従って図 2-6 の凡例は、多様な語形をまとめてある。

12) 東北方言音韻変化によるカナ表記の多様性を整理して、2 系統にまとめてある。

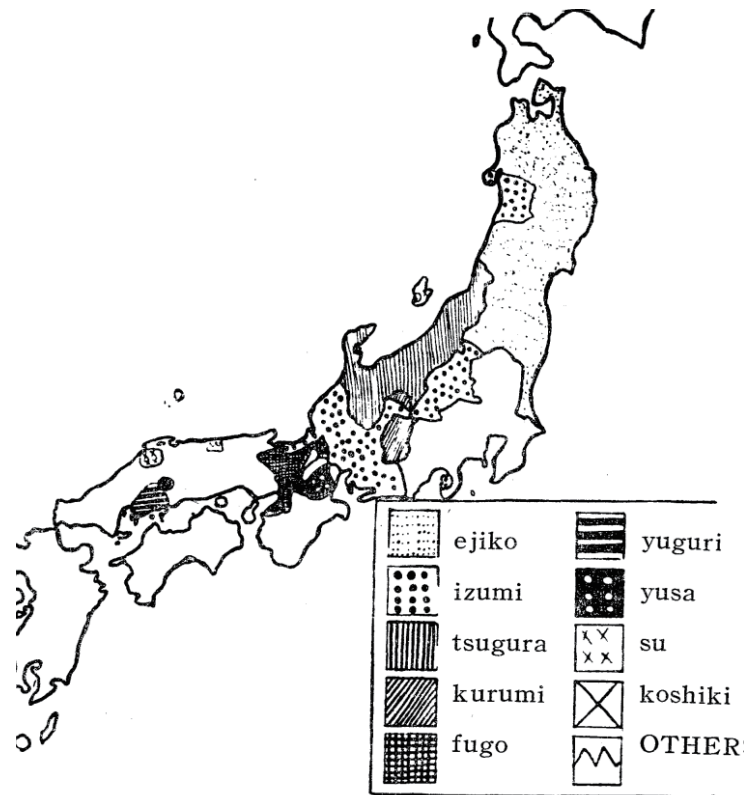


図 2-4 「いじめ」(育児籠)の全国分布
nationwide distribution of IJIME (child basket)

IZIME 系の語源は「飯詰め」で御飯の保温用の藁細工品だという。それが大きく作られ、乳児を入れておくのにも使われたとされる。この説によれば、IZIKO 系は IZIME の末尾音節を脱落させて指小辞の *-ko* を付けたもので、新形になる。

図 2-5 に、いじめ(育児籠)という調査項目の IZIMEKO *ijimeko* という新方言形のグロットグラムを再掲する。鶴岡旧市内と酒田旧市内に密に分布し、農村部の中年以下にも散発的に分布する。近代に広がった新方言と読み取れる。

その後 21 世紀に、別の調査が行われた。江戸時代の鶴岡の方言集『浜荻』の追跡調査である。1950 年の国立国語研究所の鶴岡共通語化調査の際に 3 世代の調査が行われたが、一部が公開されたのみだった。2010 年代に 4 世代の調査を行い、7 世代(20 年間隔)の合計 140 年の世代差を示す方言地図が、公開された(井上・半沢 2019)。その後分析語形を増やし、かつ方言地図でなく「単純化グロットグラム」の形で公開しつつある(井上・半沢 2021.2, 2021.4, 2021.9, 2022.2, 2022.9, Inoue & Hanzawa 2021.9)。鶴岡から各調査地点への昔の道路距離によって地点を配列し、年齢と組み合わせて、グロットグラムにした。

図 2-6 に示す。この年齢差と地域差から、語史を読み取ろう。■は『浜荻』に記された庄内方言「いじめ IZIME」である。1950 年調査の 1930 年以前生まれの世代では、5 人が使うだけに衰退した。2018 年調査では、1940 年代生まれの高年層一人が答えるのみに激減した。

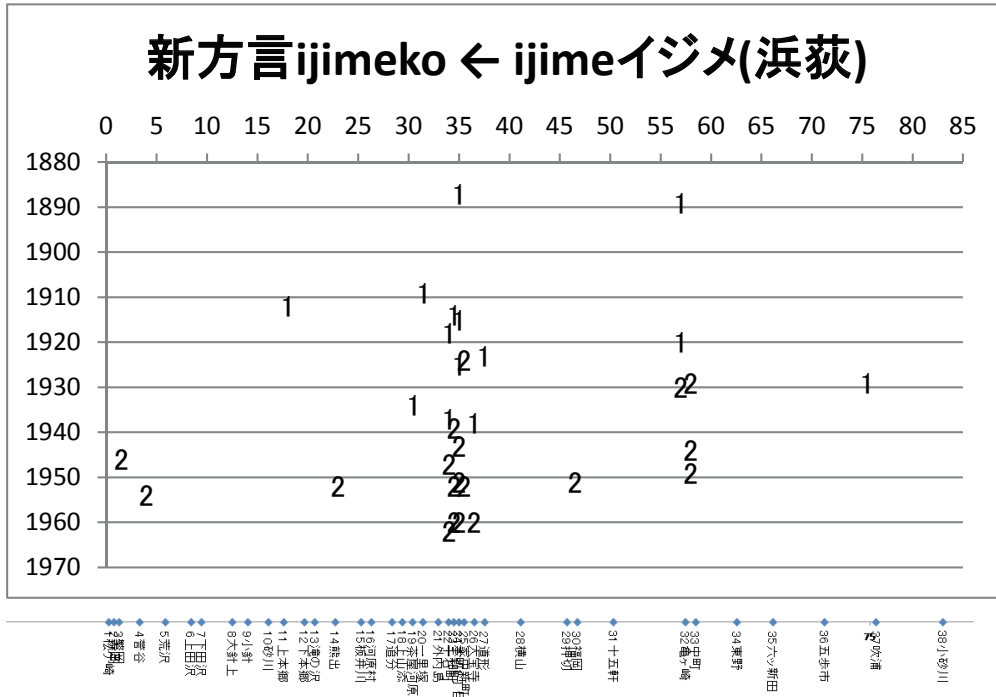


図 2-5 新方言「いじめこ」(育児籠)のグロットグラム
glottogram of new dialect IJIMEKO (child basket)

◎の IZIMI が図の右側（庄内北部）に分布する。図 2-4 の秋田県の分布に連続する。IZIME、IZIMI とともに 1950 年当時の若い世代に広がっていた。しかし 2018 年調査では、北部高年層 1950 年代生まれにわずかに残るのみである。

/ の IZIKO は 1950 年調査で北部を除き、ほぼ全域に分布していた。しかし 2018 年調査では中年層以上に残るのみである。

□の IZIMEKO が代わりに勢力を急に広げた。1950 年調査では 1910 年頃生まれの一人が答えていた。先駆的採用者だったのだろう。1960 年代の「庄内グロットグラム」調査では鶴岡周辺と酒田が主だったから、酒田付近で発生し、都市部に早く普及したようだ。IZIKO と IZIME の接触地域で混交によって生まれた新方言と見られる。一方で民間語源による使い分けも生じ、IZIME は民具、IZIMEKO はその中の幼児と解釈する人もいる。みやげ物として、民具の中に入った赤ん坊の細工が売られているが、「いずめ子人形」と称されている。

民具自体の使用は、戦後、特に農村近代化運動のあった 1960 年代以降急速に衰えたが、地域差もある（祖父江他 1957）。図 2-5 によれば、中学生は知らないし、答えない。実物衰退に伴って廃語になったわけである。

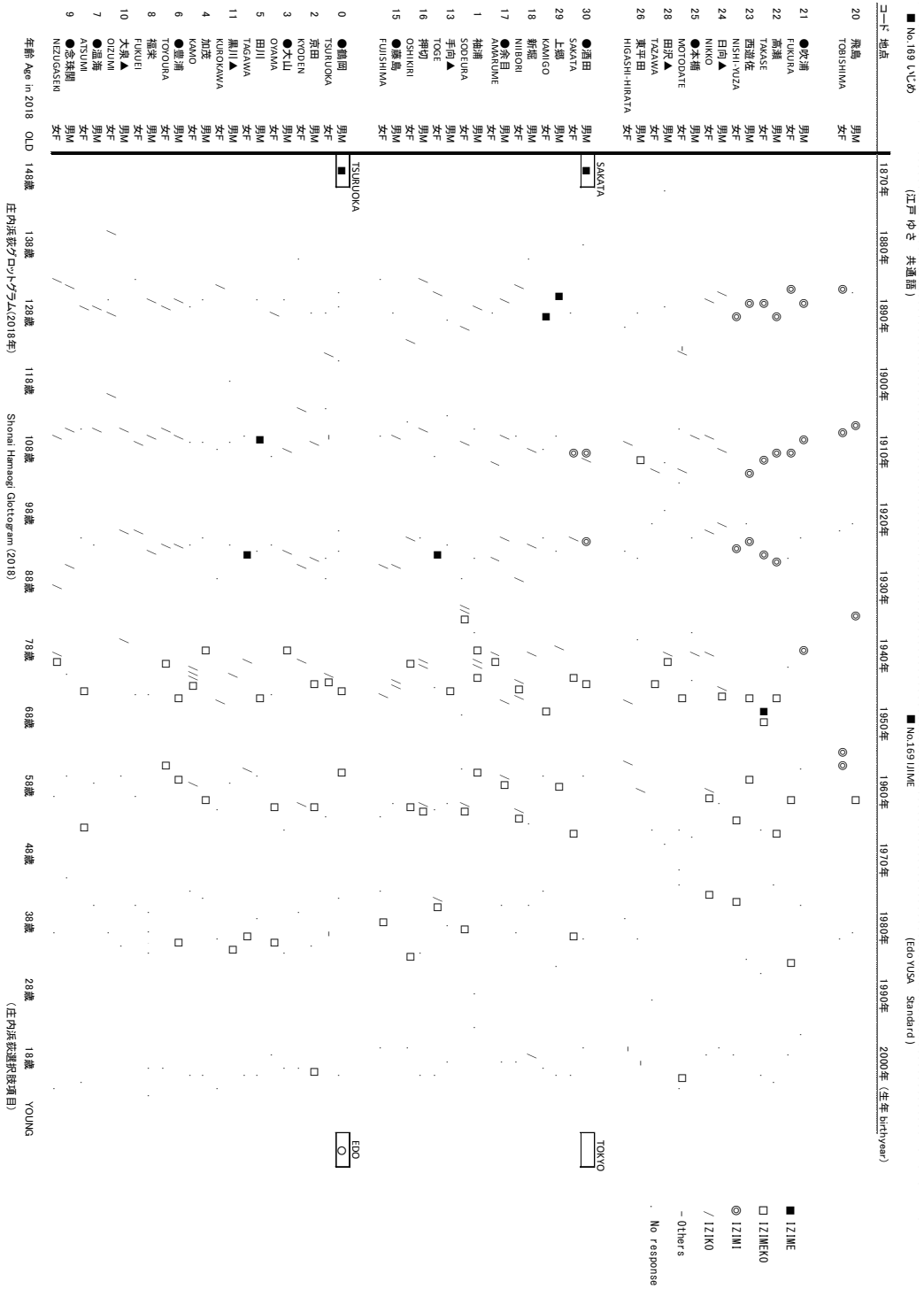


図2-6 『浜荻』『いじめ』(育児籠)の単純化グロットグラム
simplified “Hamaogi” glottogram of IJIME (child basket)

以上「いじめ」(育兒籠)の語史を見た。庄内地方では、語源に近いIZIMEを(西方から)取り入れた。1767年成立の『浜萩』に「いじめ」として示されているから¹³⁾、江戸時代のことだったろう。その後北部ではIZIMIを生み出した。さらにその後東北全域に指小辞の-koを付けたIZIKOが、当時の新方言として広がったのだろう。庄内地方では両者の混交により、1950年頃に新方言IZIMIKOを生み出した。しかし実物そのものが使われなくなり、廃語化した(obsolescence)。

「新方言」は下からの言語変化で、眼前で進行中の言語変化だが、古い時代から、何度も繰り返して登場していたのだ。他の新方言や共通語または廃語化により、若い世代での使用が減ることもある。これまでの名称を使うと(井上2000)、「中興方言」である。普及しつつきた新方言を「とうのたった新方言」と呼ぶこともできる。しかしヨーロッパの都市地名のOld Newtownにならって、「古い新方言」Old New Dialect、「新しい新方言」New New Dialectと並べることもできる。重要なのは新方言が歴史上常に繰り返し生じていたことで、今回のように江戸時代以来の方言変化の実証資料によって、確認できる。

2. 5. 新方言形使用率の総合グロットグラム

以下では、多数のグロットグラムを総合的に考察し、一般傾向を見出す。14個の新方言のデータをすべて集めて一つのグロットグラムにしたのが図2-7であるが、後述の標準語化(図3-4)と似たパターンが現れた。つまり、方言の新形の使用は、都市部の若い話者に多い。

14枚の図の数値の1, 2を話者ごとに積算すれば、新方言使用の合計値が分かる。図2-7に庄内グロットグラムの新方言15項目の合計値を示す¹⁴⁾。使われ方の多さを記号の大きさ・濃さで示した。

■と▲を見よう。鶴岡市中心部の10代のみが新方言形を多く使う。◎印に注目すると、鶴岡市中心部の話者は、10代だけでなく、その上の世代の人も新方言形を使う。中心商店街の本町一丁目(鶴岡銀座)では当時の中年層の人もよく使っていた。このあたりが鶴岡の新方言の発信地だったらしい。それに対して、鶴岡市の遠方の地点の話者で新方言を使うのは、若い人が主である。遠方の人と高年層は新方言形をあまり使用しない。

13) ご飯の保温容器にも同じ形の民具が用いられ、「飯詰め」(イイヅメ)が語源と言われる。「浜萩」で「いじめ」と記されているのは、鶴岡で江戸時代前期よりも前にシス、ジズなどの混同が起こっていたことの証左になる。

14) このときの集計は15項目だったが、1項目をのちに省いた。

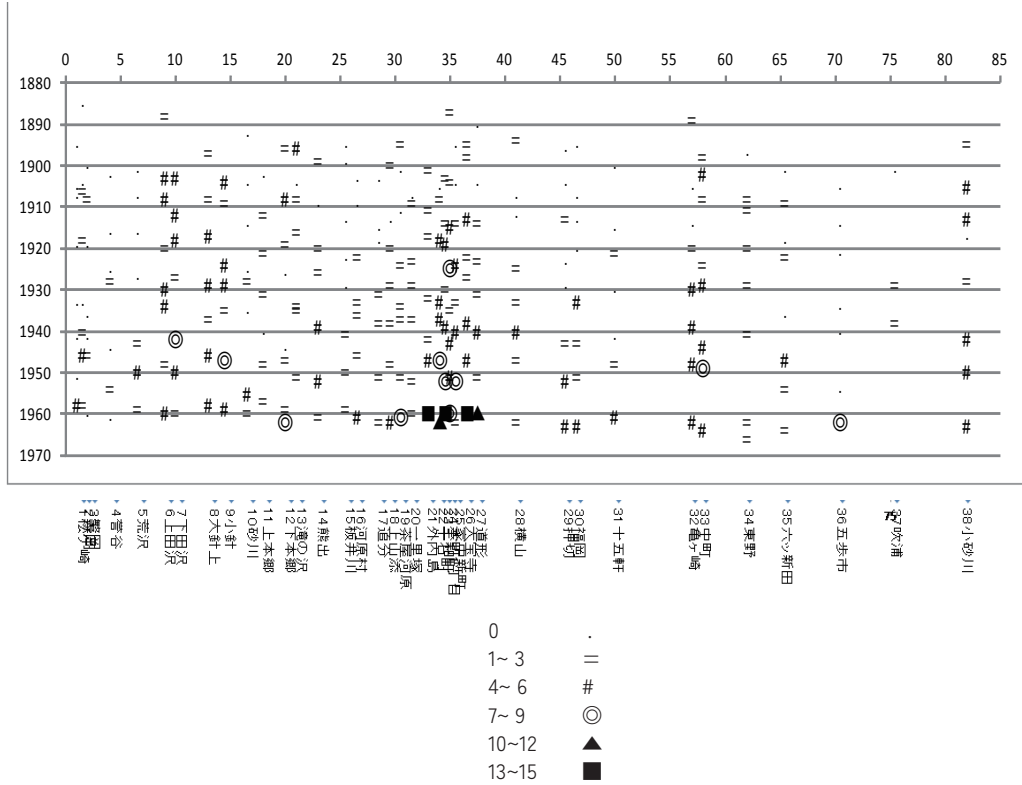


図 2-7 新方言形 15 語使用率
usage ratio of 15 new dialect forms

新方言は、単純な山型の分布を示さず、むしろ、富士山のような急峻なコニーデ（円錐）火山に似たパターンを示している。新方言は市内と近郊農村の差が大きい。つまり、鶴岡市街地で生まれ、採用された新方言は、次世代に継承されるものの、近隣の農村部にはなかなか拡散・伝播しないのである。市街地と農村（方言でのゼンゴ、在郷）の間には壁があるようだ。これは地理的な違いでなく、社会的な違い、都市部と田園地帯の間の職業および産業構成の異なりによる。これまで気づかれてはいたが、具体的な数値やグラフで示されることはあまりなかった（井上 1989）。

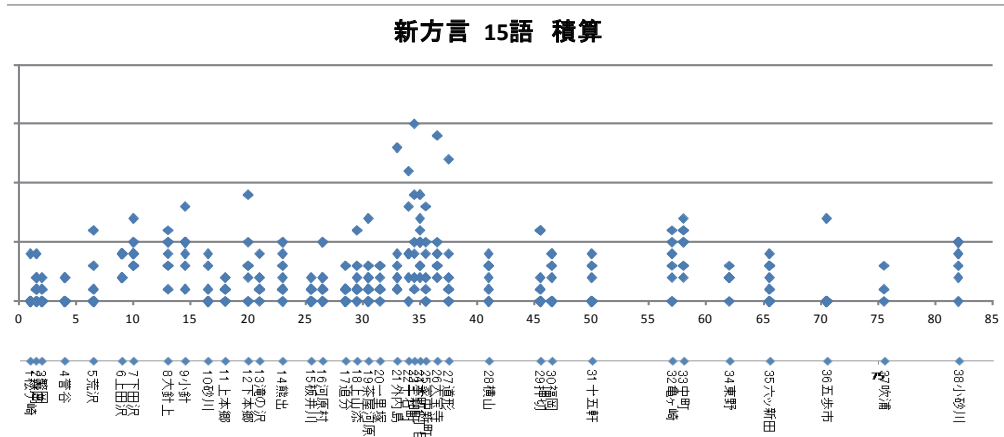


図 2-8 新方言形積算の地点差
geographical differences of usage ratio of accumulated new dialect forms

2. 6. 新方言形の地点差

図 2-7 では新方言使用率を 6 段階に分けて非連続な記号で示したが、新方言使用率を忠実に連続的に示すこともできる¹⁵⁾。図 2-8 の縦軸に庄内グロットグラムの新方言形の合計の値を示す。上下の軸の表示を新方言使用率に入れ換えて、生年を無視する（若い人が多くの場合上になる）。最高点は鶴岡旧市内で、とびぬけた個人が目立つ。9 小針付近、33 酒田市中町付近にも山がある。鶴岡から 20km ほど離れたところであり、鶴岡の徒歩での日帰りが困難な地区にあたる¹⁶⁾。初期の分析で鶴岡文化圏として約 12km 以内を分析して、きれいなピラミッド型の分布を見出したが、その外側が違うことが分かった。新方言が中都市に特に多いと分かった¹⁷⁾。

3. 標準語形のグロットグラム

3. 1. 標準語形「クレル」のグロットグラム

第 3 節では標準語形を取り上げる¹⁸⁾。図 3-1 「クレル」では、図 2-1 の新方言「ケル」と同様に、2 は標準語形「クレル」単用、1 は方言形との併用を示す。

15) 図化の都合上同一地点の同一点数の人が重なる点は、不正確である。

16) 南端の値の大きさは、秘境と言われた大鳥と田沢の方言の古さによる。例えば r 脱落などの近代の鶴岡の変化を受け入れていない。一方で、シェからセの変化をいち早く進めた。方言意識としても山奥は「ことばがきれい」「標準語に近い」と言い伝えられていた。また酒田市は港町、商業都市として独立し、鶴岡市と複眼都市と言われる。

17) 新方言は変化の初期なので、高年層には広がらず、ほぼすべての地点に使用率ゼロの人がいる。次節の標準語と違う。また標準語では（東京からの）鉄道距離および駅からの道路距離が影響しそうな分布パターンが見られたが（井上・半沢 2021.9）、新方言では観察されない。伝播のルート（対面コミュニケーションか否か）が影響しているのだろう。

18) 用法・意味範囲の広狭は今は無視する。

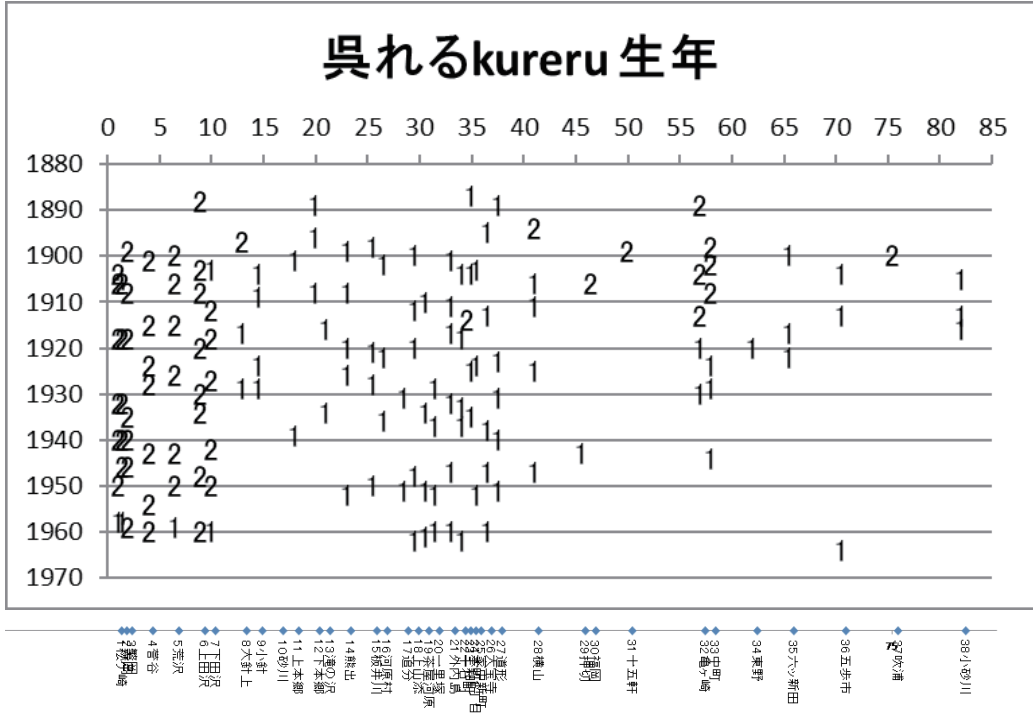


図 3-1 標準語形「クレル」のグロットグラム
glottogram of standard Japanese “kureru”

小さい点で示した元のグロットグラム (図 1-2) では気づかなかった、思いがけない分布が現れた。標準語形が中心都市の鶴岡市や酒田市の若年層で特に多いわけではなく、南部 (左側) の山間部や北部飽海 (あくみ) 郡の高年層に多い (南端の大鳥では多くの地点で調査したために記号が重なっている)。図 2-1 で見た新方言ケル普及の裏返しである。また北部で若い世代にクエルが普及したためである。庄内地方では、かつて標準語と同じ語形クレルが使われていたが、この 1 世紀ほどに新方言が発生して、以下の 3 段階の変化があったのだ。図 3-1 は第 1 段階にあたり、図 2-1 は第 3 段階にあたる。

1 クレル → 2 クエル → 3 ケル

3. 2. 標準語個別グロットグラム

個別グロットグラムは標準語の各語形について作図できる。図 3-2 以下に標準語形 20 項目を使用度数の多いものから順に提示する¹⁹⁾。鶴岡市中心部に分布するものと、南の山間部を含めて鶴岡市以南に分布するものがある。

19) 以下に標準語形 20 語を示す。no の付くものはその項目で無回答だったので、つまり標準語に存在しない語、俚言=特有語の項目である。いれ (ろ) 教える お手玉 降り (ろ) 枯れ (ない) くれる こしらえ (る / て) こわれた 連れ (て) どけ どもり ひざ ひたい まぶしい みょうが わから (ない) no イジメコ no キンカ no コビタナ no モサバ。

3. 2. 1. わからない

「分からない」では標準語形使用者ゼロだった。

3. 2. 2. こしらえ

「こしらえる」を答えたのは、中年以上の3人だけ。古形としてのコシヤウ以外に、標準語を目指して「コシラウ」とも言った。

3. 2. 3. 教える

「教える」は若い世代だけで、標準語形が普及したのは学校で使う用語だからだろうが、少ない。古形はオシエルだった。

3. 2. 4. こわれた

「こわれた」は鶴岡周辺と酒田で使われる。方言形ボッコレダと場面的に使い分けられる。

3. 2. 5. くすぐったい

「くすぐったい」は庄内各地の中年以下で答えが得られた。方言形コチヨバテが盛んで場面差として使い分けられる。

3. 2. 6. 「いじめ」（育児箒）不使用

「育児箒」は、当該方言の「特有語」なので（井上 2000）、この項目の無回答・不使用は、標準語・全国共通語の話し手としては当然と解した。「知らない」と答えたのは、当時の中学生に多い。

3. 2. 7. どけ

「どけ」を標準語と位置付けた。若年層に広がっていて、地域差が目立たない。方言形はヨゲレ、『浜荻』にはシャレが載っていた。

3. 2. 8. noこびたな 不使用

「おおい紐、おんぶ紐、子負い紐」の不使用・無回答・知らないを、標準語と位置付けた。当時の中学生に広がっていた。「育児箒」とパターンが似ている。

3. 2. 9. お手玉

「おてだま」という標準語形の受容には、地域差があり、鶴岡では高年層も使っていた。その後全域の若い世代に広がった。『浜荻』にはダマが記録され、鶴岡付近に近代まで保たれていた。士族・商人に早く普及したのだろう。郊外にはザック類の方言形各種が普及していた。

3. 2. 10. 連れ

「連れて」の標準語形は鶴岡周辺に多い。かつてr脱落によるツエデが生じて普及したが、いち早く標準語形に回帰したのだろう。

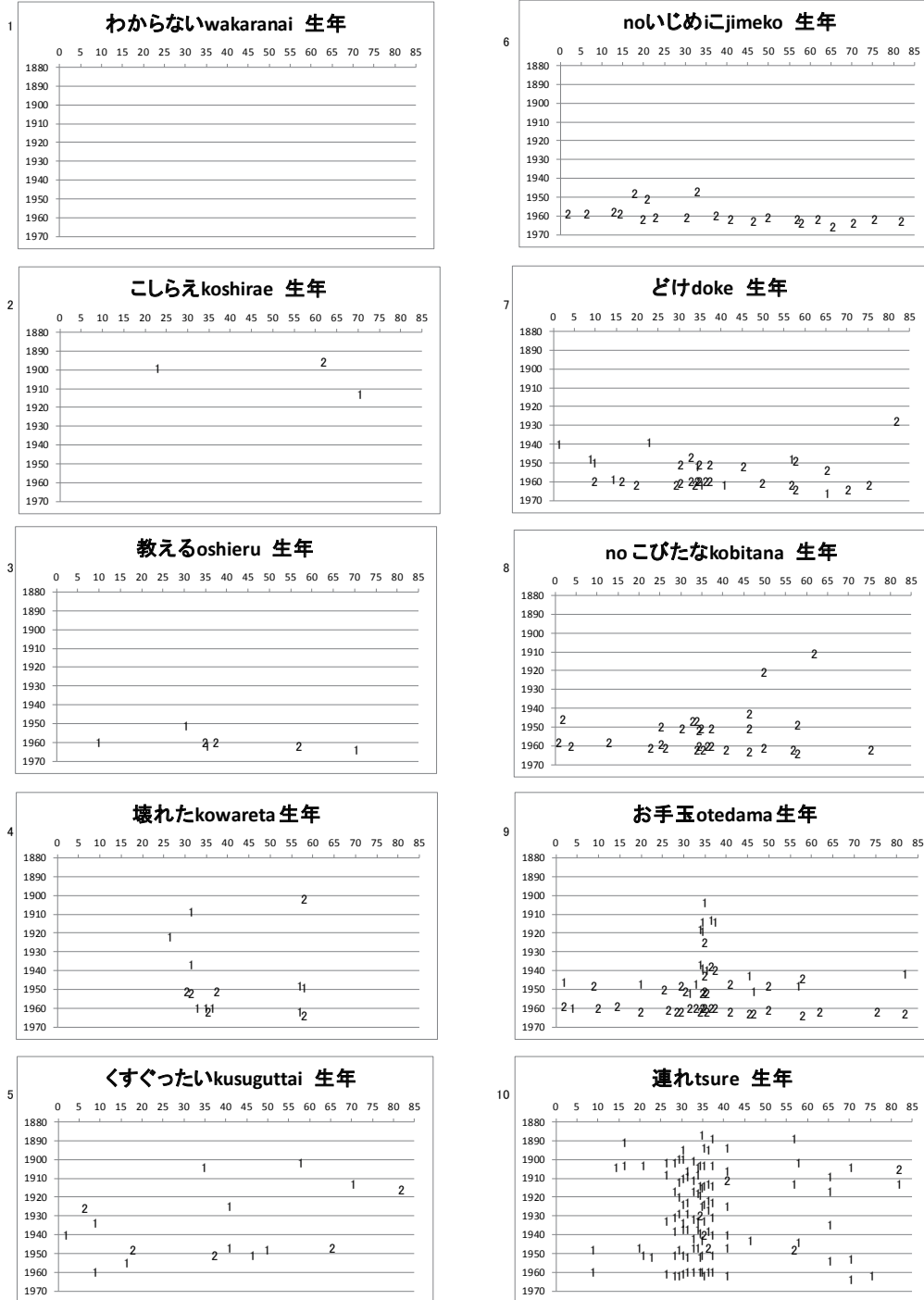


図 3-2 標準語形 20 項目のグロットグラム (1)
glottogram of 20 standard Japanese (1)

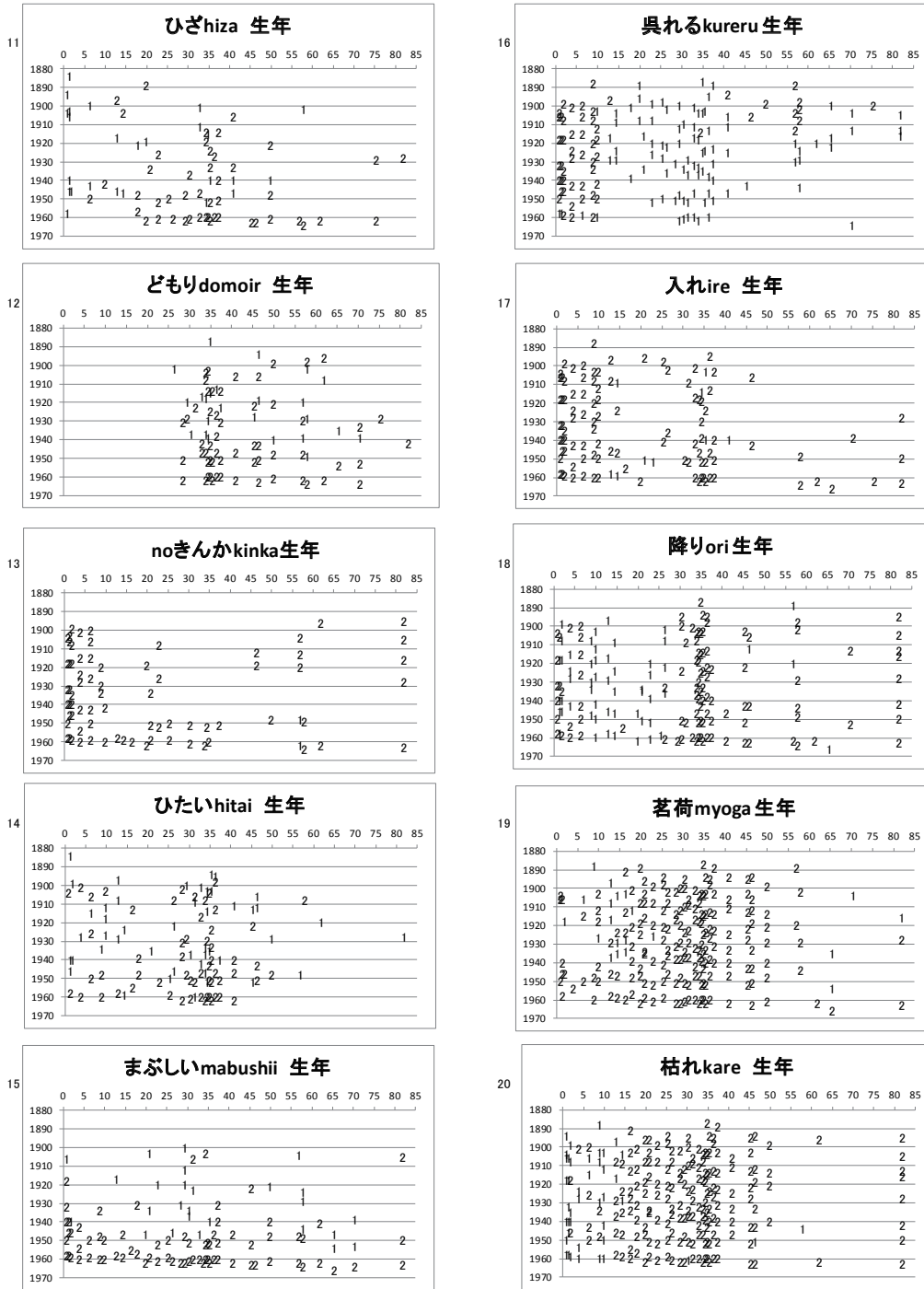


図 3-3 標準語形 20 項目のグロットグラム (2)
 glottogram of 20 standard Japanese(2)

3. 2. 11. ひざ

標準語形「ひざ」は、庄内全域に広がる。

3. 2. 12. どもり

標準語形「どもり」は、鶴岡周辺以北で使われる。南部は方言形のマmanaギを使う。

3. 2. 13. 「凍雪」(キンカ・テカ) 不使用

「凍雪」(圧雪、固くこおった雪道) の不使用・無回答・知らないは、当時の中学生に多いだけでなく、南部の全年齢層に見られる。南部の山間部は積雪が深く、大勢が歩いて踏み固められる「凍雪」現象がまれだっただからだろう。調査地域全体としては、「特有語」なので(井上 2000)、不使用・無回答を標準語と同じ扱いとした。

3. 2. 14. ひたい

「ひたい」は地域差があり、鶴岡を含めた南半に多い。全体としては若い世代にやや多い。1960年代の調査(羽越調査、LASD)でも庄内南部に分布していた(井上 2009)。

3. 2. 15. まぶしい

「まぶしい」も全体に広がり、若い人ほど多い。『浜荻』のカガボチから新方言形カガボシが生まれたが、共通語化により、中興方言、古い新方言 *old new dialect* に化した。

3. 2. 16. 呉れる

「くれる」については前述した。かえて北部、若い世代で減っていて、他の標準語形と違う。新方言ケルが内陸地方から強力に流入したからである。

3. 2. 17. 入れ

「イレ(ル)」という標準語形はr脱落の少ない南部の全年齢層と、鶴岡旧市内と北部の若年層に分布する。標準語化が単純でないことを示す。

3. 2. 18. 降り

「オリ(ル)」という標準語形も似ている、全体でよく使うが、ことにr脱落の少ない南部の全年齢層と、鶴岡旧市内と北部に分布する。

3. 2. 19. みょうが

「みょうが」(茗荷)は音韻的共通性がないのに、「入れる、降りる、枯れた」などと似た分布を示す。全体でよく使うが、北部には及んでいない。方言形で(拗音を使わずに)ミヨガとも言った。きゅうりをキウリと発音するのと並行的である。

3. 2. 20. 枯れ

「かれた」は全体でよく使うが、北部には未だ及んでいない。

3. 2. 21. 標準語形のまとめ

以上 20 語を見たが、単語ごとの違いが目立つ。しかし普及率順に並べると傾向が見える。標準語普及は一直線ではない。鶴岡と酒田の違いがあり、南部と北部の違いがある。図の左上から

右下へ、南北（図の左右）にぶれながらも一定方向へ進むように読み取れる。標準語使用については、鶴岡が色濃い。調査地点が密集しているのは、市内の学区による差を精細に見るためだったが、効果があり、児童の使う遊戯語などで旧市内の内部の違いが見られた（井上 2000）。また職業的住み分けによる地域差があり、内川を境に（旧士族の住んだ）山の手的ことば対（旧町人の住んだ）下町のことばとして、分けられる²⁰⁾。

3. 3. 標準語形使用率のグロットグラム

以上 20 枚の図の数値 1、2 を話者ごとに積算すれば、標準語使用の合計値が分かる。図 3-4 に庄内グロットグラムの標準語形の合計値を示す（単用が 2 点なので、最高値は 40 点である）。標準語形の使われ方の多さを記号の大きさ・濃さで表現した。凡例を下に掲げる。

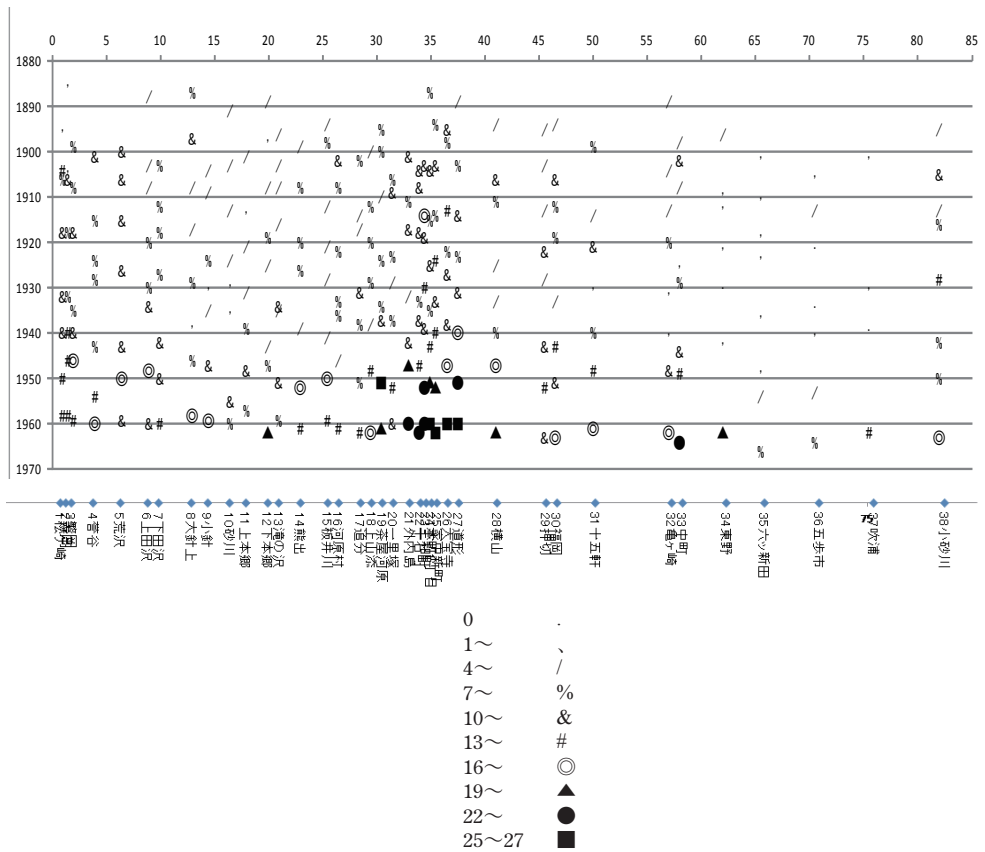


図 3-4 標準語形 20 語使用率
 usage ratio of 20 standard Japanese

20 語の標準語形総計のデータを合計すると、予期されたように、標準語形では左右と上下（つまり地域と年齢）の違いが大きい。標準語形は鶴岡市の中心的地域でよく使われる²¹⁾。記号の■

20) 地域差は中学校の学区としても表れ、一中士族、二中農民、三中商人と性格付けられる。

21) 1950 年代以降に生まれた人は、鶴岡旧市内でも郊外でも盛んに標準語を使う。

●▲で示すように、鶴岡市中心部付近の若い話者は他の話者より多く標準語形を使う。◎で示すように、鶴岡旧市内の中年層と郊外の若い人が標準語をやや多く使う。鶴岡旧市内と郊外間のコミュニケーションギャップは、新方言と比較して、大きくない。これは、標準語化が上からの変化であるのに対し、新方言が下からの変化であるという論とよく一致している。教科書やマスコミによって、標準語が急に広がったのだろう。標準語は鶴岡旧市内だけでなく、この地域の若い人に横に広がっている。火山でいうとハワイのマウナケアのようなアスピーテ（楯状火山）のなだらかな形である。

3.4. 標準語形の地点差

垂直の軸の表示を入れ換えて、個人ごとの標準語使用率にすることもできる。図3-5のグラフでは垂直の軸は年齢と無関係に使用率を示す（若い人が多くの場合上になるが）。全体のパターンは図3-4と同様で、標準語使用は新方言と同じく鶴岡がトップだが、旧市内とその外の違いがはっきりしない。33 酒田市中町付近にも山がある点は似ている。鶴岡から20kmほどにあたる。

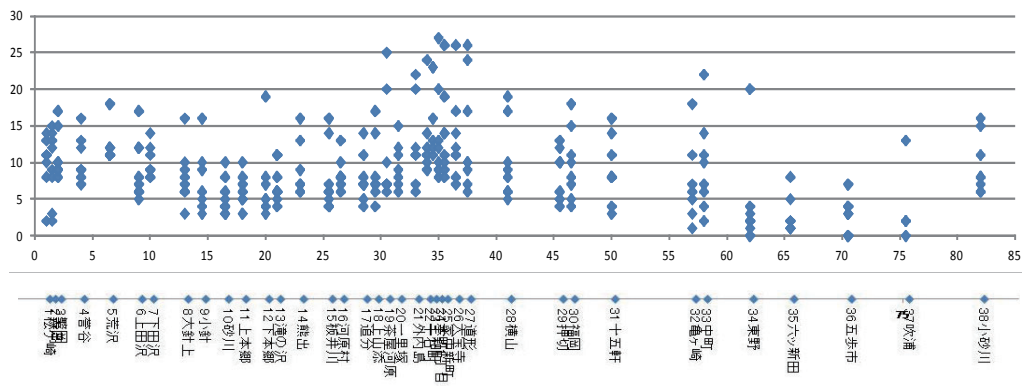


図3-5 標準語形積算の地点差
accumulated differences of 20 standard Japanese

新たに浮かび出たのは、底上げとも言えるパターンである。大部分の集落で、標準語使用ゼロの話者は少ない。ただし酒田市以北には標準語使用ゼロの話者がいる。庄内地方内部の共通語化の違いを示し、東京からの鉄道距離に比例しそうである²²⁾。集落内のことばの違いの小ささ、地域内の統一性、まとまりを示す。

酒田32, 33は庄内地方の第2の中心地と位置付けられる。民衆のステレオタイプでは鶴岡に比べて酒田は言葉が荒いとされる。城下町鶴岡対港町（商業都市）酒田という市民の性格の違いにもよる（民俗行事などにも両都市の差が見られる）。敬語の発達の違いがあるが、このデータによれば、共通語の受容度も違う。酒田文化圏の北側にあたる地域ではさらに共通語化が遅れている。

22) さらには鉄道駅からの道路距離に比例する。急行・特急停車駅（中都市）はさらに共通語化の点数が高いことからいうと、距離だけでなく列車の本数なども考慮する必要がある。この調査の鉄道駅のある地点は、鶴岡、酒田、吹浦、小砂川で、鶴岡と酒田には特急が停車する。

ことに酒田市以北で標準語使用が少ない（ゼロの人もある）ことは、このグラフを作るまで気づかなかった。標準語形の個別グロットグラムに戻ると、「みょうが」「ひたい」「くすぐったい」「降り（て）」「入れ（て）」「枯れ（て）」「連れ（て）」では（若い世代を含め）北部に標準語形が分布しない。これらが作用したためと考えられる。r脱落という（恐らく江戸時代に起こった）変化が、近代になっていち早く回帰（標準語化）したのだろう。戦後一斉に起こった共通語化と別のパターンを示す。これは後述図 4-6 の年齢差の点からも推定できる。

図 3-5 では、地層の褶曲構造を道路の切り通しで観察するように、庄内地方を南北に貫く標準語普及の動きを具体的に観察できた。東京・京都に近い南部で点数が高い。成層火山の（第 2 回目の爆発による）中層の火山灰層と見ることもできる。

4. 庄内の新方言形と標準語形8km内

以上で庄内地方を南北に貫く形で新方言と標準語の年齢差を見た。鶴岡市（と酒田市）の中心性が見えたが、その勢力が距離的に限定されることも分かった。

4. 1. 城下町鶴岡と等高線・等語線

グロットグラムの一般的な分布パターンを把握するために、鶴岡旧市内付近の地点（図 1-1 で示した範囲）に限定して、標準語形（図 3-5）と新方言形（図 3-4）の使用量の合計を算出し、**図 4-1** に示した。ここでも地理的な距離が忠実に示されている。地理的な差は全体として大きい。鶴岡旧市内の 7 地点（中心市街地 = 赤 4、郊外 = オレンジ 3）の話者は、標準語と新方言を多く使用する。鶴岡旧市内以外の 8 地点（緑色、南部 6、北部 2）では、標準語も新方言もあまり使われない。

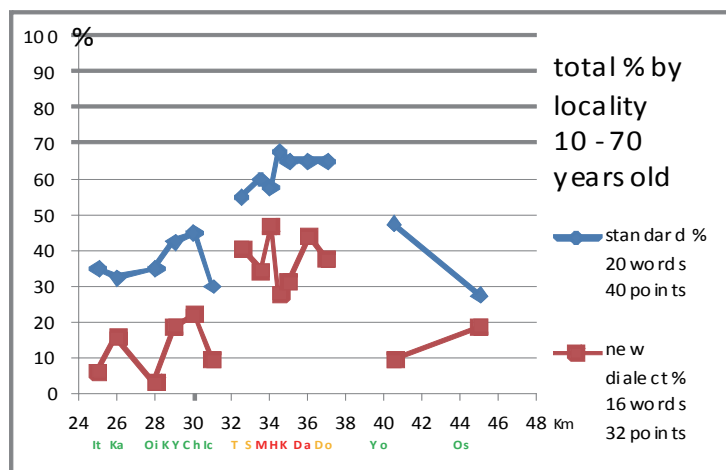


図 4-1 鶴岡付近の標準語と新方言の使用度
 usage ratio of standard and new dialect near Tsuruoka

4. 2. 標準語と新方言の中心部での折り畳み

グロットグラム調査は通常、直線状（道路沿いや鉄道沿い）に実施される。都市化した地域が新形の伝播の中心であると解釈すれば、グロットグラムを都市の中心で二つ折りにし、周辺の二つの農村地域を平行に移動させることが、比喩的に可能である。図 4-2 は、そのような手順の結果である。鶴岡の城跡に近い旧士族の武家地、家中新町 (K) を文化都市の中心地として想定した。現在では、インテリ層やホワイトカラー層が住む住宅地である。この地点を 0km とし、他の地点への道路距離を再計算した。市街地の外にある 8 つの地点（南部 6、北部 2）についても、地理的距離によって再度忠実にプロットした。

全体の傾向を近似曲線で示した。城に近い K 地点（≒山の手）では、青い標準形が最も多く使われている。一方、赤い新方言形は K 地点ではあまり使用されず、商業地（≒下町）や郊外の工業地で使用頻度が高い。これは、新方言は下からの変化（典型的には若い労働者階級の人々が採用）であり、標準語形は上からの変化（典型的には若い知識人が採用）であるという説と対応している (Labov 1972)。

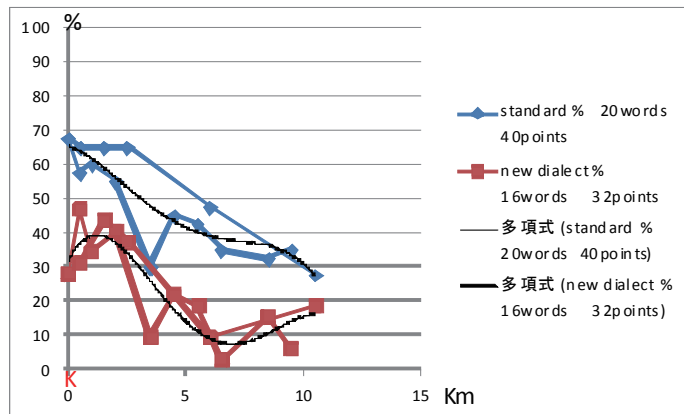


図 4-2 標準語と新方言の中心部での折り畳み
usage ratio of standard and new dialect folded at the center

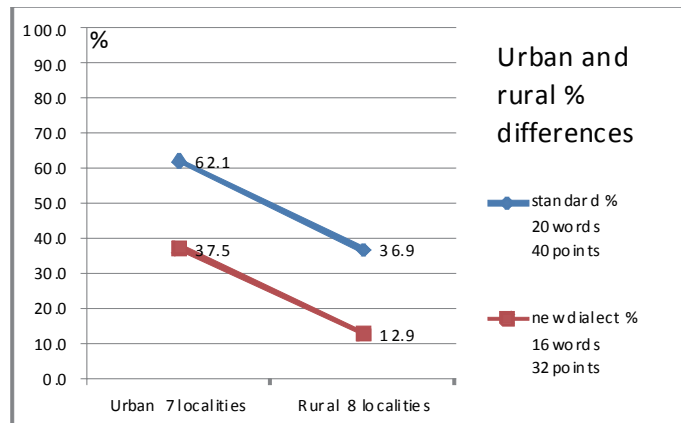


図 4-3 都市部と農村部の違い
differences of urban and rural areas

全体の傾向をさらに単純化するために、鶴岡旧市内の7地点（≒山の手+下町）を「町部」Urban、市域外の8地点を「農村部」Ruralに分類してみた。図4-3の相互の差は大きい。特に赤の新方言の差が顕著で、12.9から37.5と3倍近いのに対し、青の標準語の差は36.5から62.1と2倍弱である。

4.3. 新方言形・標準語形の地域差8km内

以上では集落内成員の平均値を用いた。大きな傾向が分かったので、以下では各個人の使用度を扱う。

図4-4、図4-5のグラフは、そのような手続きの結果である。半分に折る形で図化し、折り返したことが印象づけられるように、図の右を空白にした。中央として、鶴岡市の商店街、本町一丁目を設定したところ²³⁾。南北ともに似たパターンを呈した。鶴岡から8km以内は急下降を示す²⁴⁾。地理的の近接効果が大きく働く。鶴岡圏だけを取ると、諸事情が単純になるが、外側は別の動きを示す。初期には鶴岡市から11km以内にあたる15板井川～29押切の範囲をデータ入力して集計し、城跡近くのK家中新町を中心に図化して、期待通りの結果が得られた。また1大鳥～38秋田県小砂川の全地域をデータ入力して集計して、鶴岡と別の方言圏、文化圏が存在することが分かった。範囲の拡張・縮小を繰り返して、8km以内に限ると、鶴岡市中心部の影響関係がきれいに出ることが分かった。

図4-4 新方言のグラフでは、鶴岡市中心部が左端に位置づけられる。その右8km地点の集落は17追分と28横山である。新方言では、最大の使用を示す（若い）人も、全体としてのパターンも、右下がりの傾斜を示す。近似曲線を挿入した。新方言はわずかながら凹型で、鶴岡市内と郊外との差を示す。

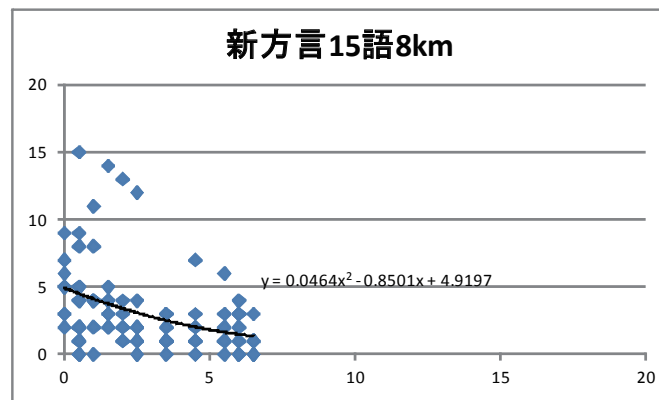


図4-4 新方言形の地域差折返し8km内
 folded geographical differences of new dialect within 8 km

23) もう一つの候補、鶴岡城近くのK家中新町は、現在の高級住宅地域で、知識層、ホワイトカラー層が住む。

24) 国際会議では16板井川と29押切の間だけを分析して、鶴岡中心のきれいな分布を得た。その後14熊出～30福岡の12km以内の図も作った。

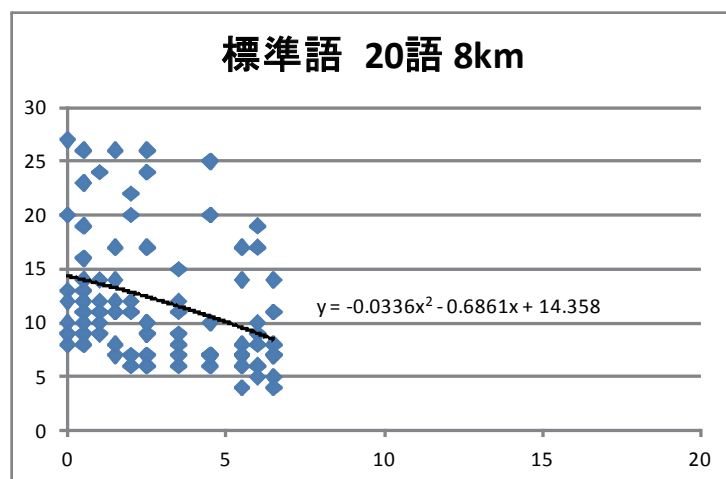


図 4-5 標準語形の地域差折返し 8km 内
folded geographical differences of standard within 8 km

対比のために標準語形を図 4-5 のグラフに示す。標準語形も、右下がりの傾斜を示すが、ゆるやかである。最大の使用を示す（若い）人も、全体としてのパターンも、点数がまとまる。零点近い人がいない点、底上げ、下支えがあると言える。ことばが一斉に変化（共通語化）することを示す。

近似直線を挿入した。傾斜は似ているが、新方言は 0 点と 5 点の違いだから、地域差が標準語より大きいと言える。また旧市内と郊外については、標準語は凸型、中膨れとも言えて、旧市内と郊外の違いは小さい。コニーデとアスピーテの対比と言える。コニーデとしての新方言は、高い点数の若い話者だけを取ると、傾斜が急である。アスピーテとしての標準語形は、なだらかな傾斜を示した。鶴岡中心地から 8km というのは、いい手がかりだった。買物圏・商圈の調査資料によれば、その先だと鶴岡以外の中心地の影響がある。調査当時（1970 年代）は商圈も通勤圏も通婚圏も狭く、旅行などの移動も少なかった。新方言と標準語形のグラフの共通点は、都市と近郊、若年と高年の違いが出た点である。都市と近郊の言語差は距離にほぼ比例する。

4. 4. 年齢による違い

ここまで、地理的（あるいは社会的）な差異について分析してきた。そこで、ことばの年齢による分布の違いを把握するために、標準語と新方言の使用率の合計を年齢層別に算出した。図 4-6 では、青の標準語の場合、年齢による差が顕著に現れている。しかし、赤の新方言の年齢差は、年長者と年少者の比率が 10 倍近いため、ある意味で、はるかに大きい。新方言形は、年齢と地理の両次元によって規定されているようである。

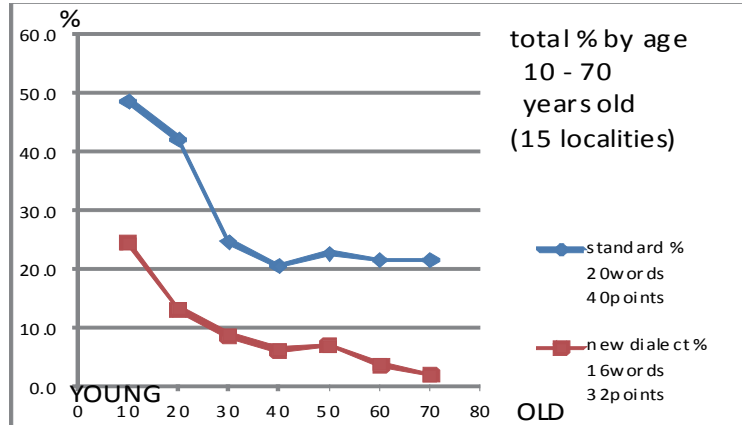


図 4-6 新方言と標準語の年齢差
 age differences of new dialect and standard

4. 5. 年齢と地域の違い

年齢と地理的要因の度合いを同時に分析するために、インフォーマントをさらに2つの要因を使って4つのグループに分けた。図 4-7 から、年齢要因（左2若、右2老）は、地理的要因（都市、農村）より重みがあることがわかる。年齢差は特に新方言形の場合に大きく、「古い農村」0.7、「若い都市」7.3 という大きな値の差がある。

4. 6. 新方言形・標準語形の年齢差

今回は同じ8km以内のデータに限って、個人ごとの年齢差の観点から集計しよう²⁵⁾。縦軸は前述と同じく新方言の個人別使用数である。横軸の生年ごとの数値によってプロットした。図 4-8 新方言のグラフでは、右端の若い世代で急速に新方言の採用が進んでいることがうかがえる。一番若い世代の当時の中学生（1960年前後生れ）では最高と最低の差が大きい。新方言14項目個別グロットグラムに戻ると、「～かった」「忘れない」「枯れた」「とられない」などの（r音がからむ）項目で鶴岡市中心部の若い世代に新方言が集中している。これらが作用して、新方言の若い世代の急上昇カーブが形成されたのだろう。

直線よりも近似2次曲線で、よく全体を表現できる。近似2次曲線は図 4-9 の標準語と似ている。しかし新方言の年齢差はある意味ではずっと大きい。年上のおよび若い話者の相対的な比率が、約10倍だからである。新方言は年齢と地理の両次元により規制されるようである。

25) 全域データの年齢差の集計は略す。

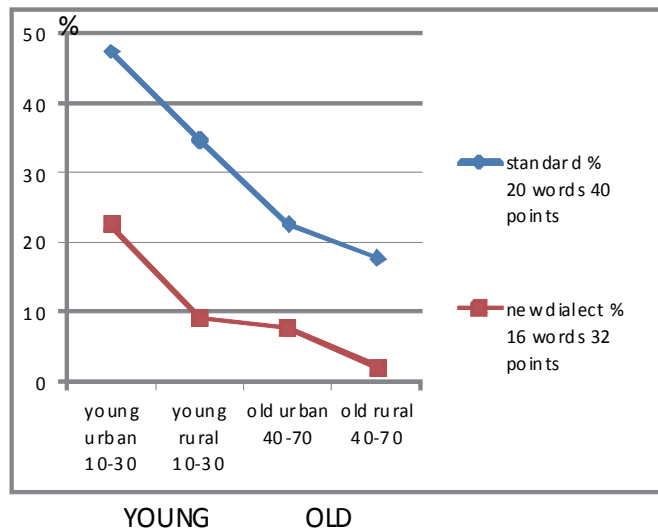


図 4-7 新方言と標準語の地域差と年齢差
geographical and age differences of new dialect and standard

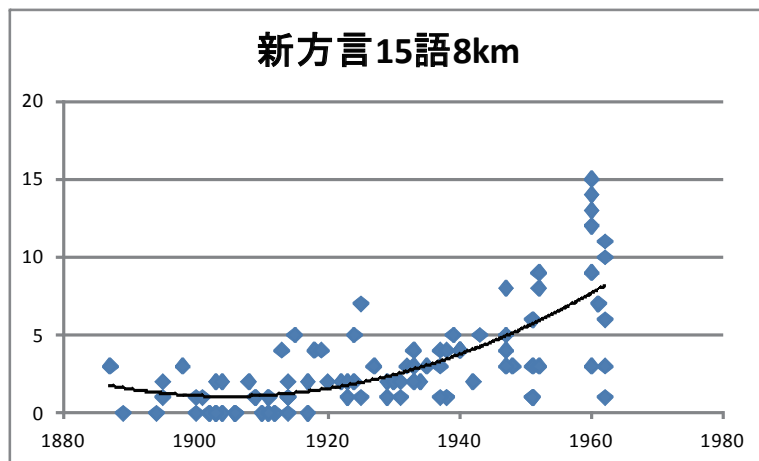


図 4-8 新方言形の年齢差 8km 内
age differences of new dialect within 8 km

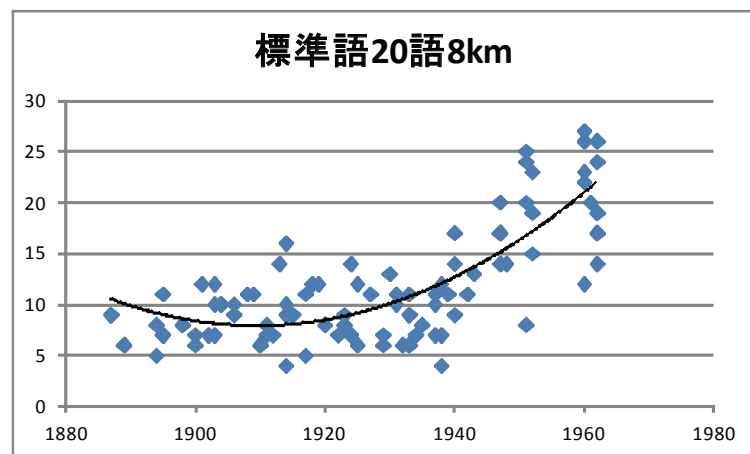


図 4-9 標準語形の年齢差 8km 内
age differences of standard within 8 km

図 4-9 のグラフに標準語形の年齢別使用率を示す。年齢差は標準語についても際立つ。1950 年以降出生の話者で急速に共通語化が進んだ。個別グロットグラムに戻ると、「どけ」「お手玉」「教える」「こびたな不使用」「いじめこ不使用」などの項目で、若い世代に一齐に標準語（と同じ語彙体系）が普及している。戦後の急速な共通語化が元である。全体として、標準語の使用は主に年齢により規制、影響される。この違いはマスメディアと教育の発達に起因している。

しかし近似曲線で示されるように、高年層が中年層より多くの標準語形を使用することもある。r 脱落を起こさなかった層の存在による。

これまで新方言と標準語の相違点を強調した。新方言と標準語の間に基本的な類似点、共通点がある。それは若い Young 都市 Urban 住民のピークである。ただし年齢的には、新方言はほぼ単純な比例関係を示すが、標準語使用は単純な正比例関係を示さない、地理的には、新方言は鶴岡中心部との違いが大きいが、標準語使用は全体に普及し、距離に左右されない、火山のコニーデとアスピーテにあたる違いがあり、伝播のパターン、メディアが違う。対面コミュニケーションの働き方の大小による。

5. 庄内の新方言と標準語の伝播過程

この関係を 4 段階（あるいは 3 段階）の濃淡で図式化（印象化）したものが図 5-1 である。新方言（左）は地理的な差が大きく、標準語（右）は年齢差も大きい。左の図は、新方言の使用度が鶴岡旧市内の若者で突出して大きいことと、鶴岡旧市内の高齢者と農村部の若者で同程度であることを示している。一方、右の図は、標準語については世代差が大きく、農村の若い人が旧市内の高齢者より標準語を多く使っていることを示している。

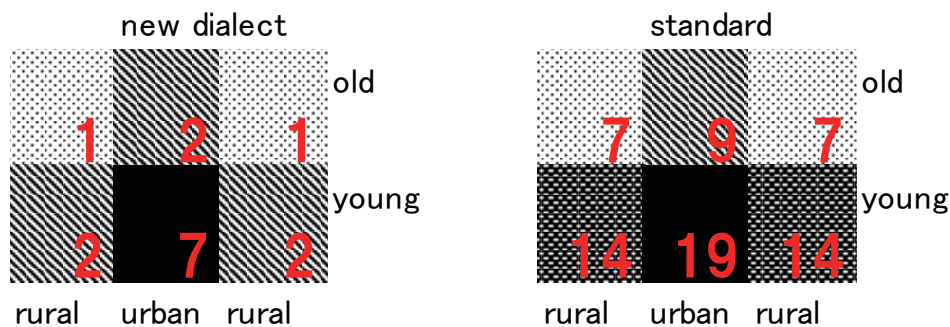


図 5-1 地域差と年齢差模式図
 a model of geographical and age differences

5. 1. 標準語と新方言の普及の2つのパターン

このように、標準語形と新方言という進行中の二つの言語変化の違いを見たところ、標準語は、アスピーテ火山のように、柔らかい溶岩が急速に広がり、なだらかな山を形成していくようなイメージでとらえることができる。新方言は、硬い溶岩がゆっくりと広がり、コニーデ火山のような高く険しい山を形成していると想定することができる。

標準語と新方言の地理的な伝播のパターンは、さらに戦争を比喩として、区別することができる。標準語の普及は、落下傘部隊が小さな（都市）場所を占領し、大きな（地方）領土を飛び越えるように進行することが多い。新方言は、歩兵が近隣の（農村）地域を一つずつ占領していくように、ゆっくりと着実に進行していく。

標準語化は典型的な近代の現象である。これに対して、新方言の誕生と普及は、人類の言語の長い歴史の中でずっと起きてきたプロセスである。近代以前にも、また地球上のほとんどの場所で、普遍的な現象として同様の伝播の過程があったであろうことは、論理的に推測される。新方言は、このように永続的な言語変化の実験室または観測装置のようなものである。

5. 2. 普及の年速

以上の知見に基づいて、標準語と新方言の普及速度を計算することができる。図 5-2 のデータに直線近似をかけると、1 年当たりの普及速度が算出される。この式から、**図 5-2** のグラフ上下に示すように、1 年あたりの伝播速度は、標準語では約 0.28km/y、新方言では 0.33km/y である。

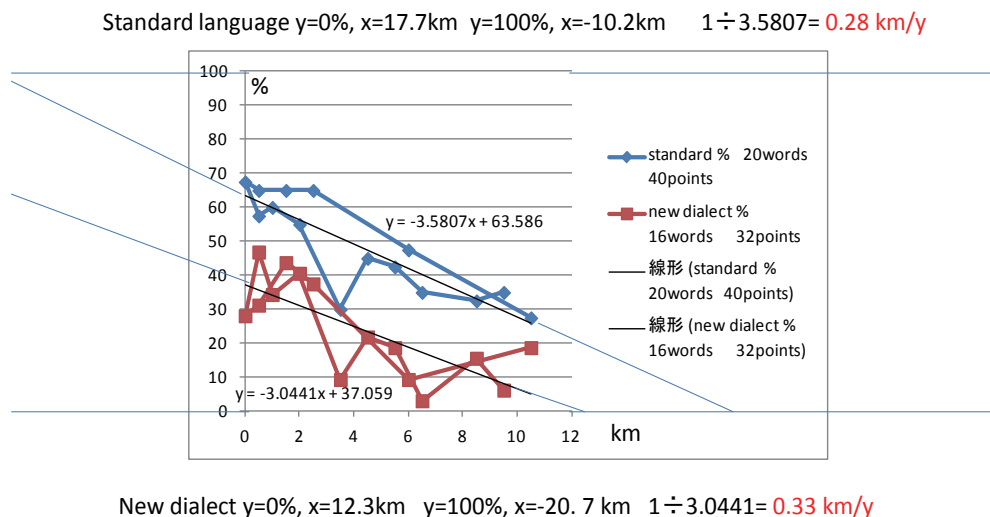


図 5-2 折りたたみグロットグラムによる伝播速度
diffusion speed by folded glottogram

方言伝播の速度については、徳川（1993）が LAJ (Linguistic Atlas of Japan) の京都発祥の語形を対象としてすでに計算している。その後、LAJ の 82 の標準語形を対象に、この仮説の再証明を試みた (Inoue 2010)。多変量解析の結果、西と東、古典と現代のクラスターが見つかった (Inoue 2004)。また、日本全国の新方言のグロットグラムデータを収集した (井上 2003)。その結果、覚えやすい数字として、年間 1km 程度のスピードが提唱された。最近、さらに試みがなされ、より多くの種類と可能性があることが分かった。熊谷 (2013) は、この試みに関連する。しかし、熊谷のデータ (LAJ) や Yarimizu (2011) の GAJ (Grammar Atlas of Japanese Dialects) のデータについては、普及速度の算出は行われていない。

伝播速度の多様性は、カナダで発表された日本地図に示されている (Inoue 2010、井上 2003)。スピードは、車の速度計のように、様々な角度で表示された。太平洋側では、人口密度が高く、経済的に発展しているため、速度が大きくなる。一方、人口密度が低く経済的に発展していない日本海側では、速度が遅くなる。

ここまで、新方言と標準語の違いを、強調して述べてきた。新方言と標準語には、都市の若者にピークがあるという基本的な共通点がある。それは何も新しい発見ではなく、ほぼ普遍的なものである。ならば、この現象を何らかの定量的な方法で定式化するのが合理的である。鶴岡市周辺での標準語と新方言の普及速度は、先ほどのグロットグラムに見られる火山型パターンを利用することで算出することが可能である。年齢差と地域間距離を用いると、図 5-2 に示すように、新方言の平均拡散速度は 0.3km/y 程度となり、上記の全国的な情報と比較すると遅い。庄内グロットグラムの伝播速度の数値が低いのは、日本海側のまとまった地域の例のためと思われる。これは、鶴岡市街地の住民と農村部の住民とのコミュニケーションがやや希薄であることでも説明できる。この違いは、等高線を使って地図上に表現することができる。通信・伝播の障害として、高い山や大きな川が指摘されている。これらは自然の障害物である。都市と農村の社会的な境界も障害として認めるべきである。これらのコミュニケーションの障害は、図 5-3 のような仮想的な等高線(等語線)で可視的に表現できる (図 1-1 にも示した)。これが本論文の基本的な提案である。

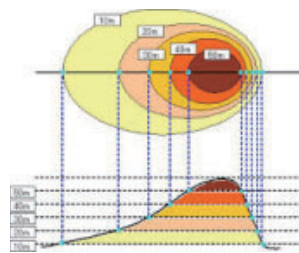


図 5-3 等高線図 (等語線図)
contour graph (isogloss)

以上、鶴岡市とその周辺のことばの違いについて、方言調査データに基づいて考察した。城下町鶴岡が庄内地方の中で占めていた優位性が明らかになった。周辺の方言に対して威光 prestige をもって働きかけるさまが読み取れた。また庄内地方南北の違いも分かった。年齢差を考慮に入れ、かつ標準語形と新方言に分けた形でも、実証された。これまで『庄内方言地図』LASD (井上 2009) の地理的分布の多変量解析などでも出た傾向で、「林の数量化理論第Ⅲ類」による結果では (井上 2000)、第 1 軸が地域を南北に分ける働きを示した。日本全体を京都または東京からの距離によって支配する周囲分布の反映だろう。第 2 軸で鶴岡中心の周囲分布を示したのは、地方規模の二重の周囲分布の反映である。

鶴岡市とその近郊の言語状況は、今後日本語諸方言を (共通語・標準語との関係において) 考察する際の基準になりうる。国立国語研究所による共通語化の定点調査の重要地点になるだろう。鶴岡市と郊外山添の地理と年齢の違いを見る試みにより、これまでに、約 1 世代のずれがあると、確かめられた (井上 2000)。グロットグラムデータのこの再分析の結果によっても、検出された。これは、鶴岡市中心部と郊外の住民のコミュニケーションが頻繁ではなく、また密でないという

事実で説明できる。

結論として、上で議論されたことを「農村の遅れ rural lag」の現象と呼ぶことができる²⁶⁾。これは「都市の威光 urban prestige」の鏡像である。方言学者、社会言語学者には常識だが、この常識を普遍的な基本原則、共通プロセスとして置くことによって、地方で発生して、地方から都市に逆流する新方言（ことに「東京新方言」）の例外的な行動が位置付けられる。この数十年で東京新方言の逆流伝播傾向の具体例が多数確かめられた（井上 1998）。実際に社会的および地理的相違を測定するために、この現象は本格的に研究されるべきである。都市および地方の住民の社会階層差は、等高線を使って都市地域の山として表される（図 1-1 参照）。

5. 3. 地理的・社会的距離

社会階層と言語の関係は、第 4 節のように、グラフで表すことができる。都市と農村の違いは、基本的には前近代（1868 年の明治維新以前）からの区別をいまだに反映している社会的区別である。また、社会階層の違いは、期待される言語能力、特に方言と標準語の使い分け、さらに敬語、書き言葉、英語などの使い分けに反映される。岡崎市の敬語に関する長期の経年調査データにより（井上 2016、井上編 2017）、「敬語の成人後採用」が明らかになると同時に、職業差も明らかになった。言語の社会階層差は、日本語では主要な研究テーマにならなかったが、ようやく研究手法が開発された（柳村 2017）。まだ課題は山積している。言語形式の普及速度を算出するためには、社会的次元を考慮することが望ましい。都市部と農村部の物理的距離は短い、社会的距離を考慮すると、コミュニケーション距離は大きくなる。

6. 二重雨傘モデル

6. 1. 雨傘モデル

かつて、標準形と新方言に基いて、下からの言語変化と上からの言語変化のメカニズムを説明するために、雨傘モデルが構築された（Inoue 1993, 1999, 2008）。標準語は、上からの圧力として日本全土に普及する。新方言は、日本各地で独自に作られ、採用されている。口語レベルでは、東京の日常会話は、他の地方の方言と同じような位置づけにある。傘の縁に位置し、東京人と地方人は新しい方言の言葉や表現を交換する。

以上、第 5 節の議論から、鶴岡のような地方都市には、それなりの威信、あるいは普及の力があることがわかった。このことは、この図 6-1 の改訂版グラフで小さな傘で示されているように²⁷⁾、様々な場所に小さな傘を追加することが必要であることを示唆している。これは、「二重雨傘モデル」と呼ぶことができる。

平面で見れば、二重の周囲分布である。さらには、地方中核都市が他の地方都市に影響を与えることも考えられ、さらに下位の町を階層構造に組み入れると、「3重、4重の雨傘モデル」（周囲分布）も想定しうる。全国レベルで地点ごとの標準語形との一致度を見ることにより、確認できるはずで、将来の研究課題である。

26) Trudgill (2004) の colonial lag になぞらえた。

27) かつてのコピー機を使った図なので、不鮮明である。

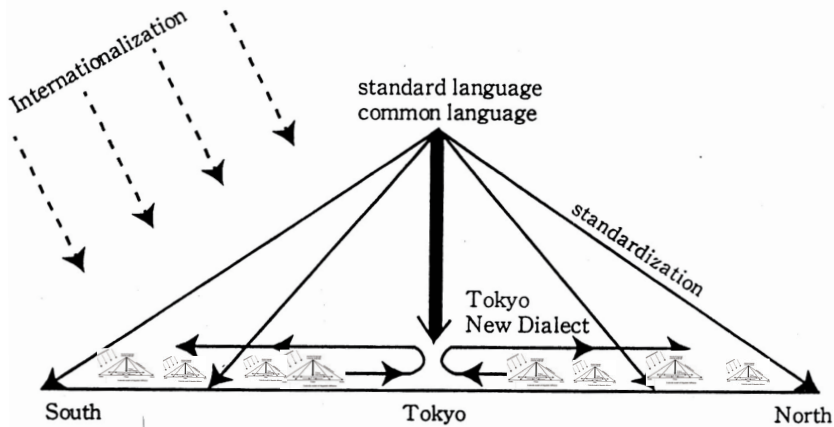


図 6-1 二重雨傘モデル
double umbrella model

6. 2. 地理的・社会的方言

方言学ではこれまで、NORMつまり Non-mobile Old Rural Male が主な研究対象であった (Chambers and Trudgill 1980)。都市部の社会言語学的研究は 20 世紀後半から発展し、主に社会経済的な諸階層を対象としている。NORM のもう一つの対比的極限として、MYUF (Mobile Young Urban Female) の研究は (Heeringa & Hinskens 2015)、標準化と新方言という言語変化のパターンを適切に説明するために重要であると考えられる。本稿で取り上げた地方都市とその周辺農村の内部構造の比較は、言語地理学と社会言語学という二つの主要研究分野の統一に向けた一つのステップである。

6. 3. 結論

結論として、本論文では二重雨傘モデルを提唱した。地方都市は、地図上の小さな山として表現することができる。それらは独自の伝播力を持ち、その内部に入り込むためには、一定の労力が必要である。その労力は等高線によって地図上に表すことができる。普及の速度を計算するためには、農村の遅れを考慮する必要がある。この都市の山の頂上に近づく労力を考慮すれば、より現実的な普及速度が計算できる。このような推論方法は、方言学と社会言語学の (幸福で) 実りある統一につながるだろう。

謝辞

本稿のデータの元は、1970年代の臨地の面接調査である。当時お相手くださった方々に重ねて感謝申し上げます。グロットグラム公開には、学术论文以外に、地元新聞などにもお世話になった。本稿は2015年に英語で口頭発表し、論文にしたので、インターネットで可読である (Inoue 2016)。日本語版では別の観点から考察したが、諸般の事情で公開が遅れた。いずれも紙数制限のために実例の一部をあげただけだったが、本稿では紙数制限がゆるやかなので、関係する全項目を掲載し、かつ大幅に加筆して十分に論じることができた。

【参照文献】 alphabet

*most of the English papers by F. Inoue are accessible through the internet.

<http://innowayf.net/>

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/person/inoue_fumio/doc/

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/18ex/achievements.xls>

秋田県教育委員会 (2000) 『秋田のことば』 無明舎出版

Chambers, J. K., and P. Trudgill (1980) *Dialectology*. Cambridge University Press

Heeringa, Wilbert (2022) Introduction to Dialectometry <http://wjheeringa.nl/slides/>

Heeringa, Wilbert & Frans Hinskens (2015) Dialect change and its consequences for the Dutch dialect landscape. How much is due to the standard variety and how much is not? *Journal of Linguistic Geography* 3:01 pp.20-33.

井上史雄 (1985) 『新しい日本語——《新方言》の分布と変化』 明治書院

井上史雄 (1989) 『言葉づかい新風景 (敬語・方言)』 秋山書店

Inoue, Fumio (1993) “The significance of new dialects” *Dialectologia et Geolinguistica* (SIDG) 1: 3-27

Inoue, Fumio (1999) “Trends of linguistic variations in modern Japan” *Area and Culture Studies* 58: 39-46.

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/person/inoue_fumio/doc/E28.pdf

井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 岩波新書

井上史雄 (2000) 『東北方言の変遷』 秋山書店

井上史雄 (2001) 『計量的方言区画』 明治書院

井上史雄 (2003) 『日本語は年速1キロで動く』 講談社現代新書

Inoue, Fumio (2004) “Multivariate analysis, geographical gravity centers and the history of the standard Japanese forms” *Area and Culture Studies* 68: 15-36. (Accessible on the internet)

Inoue, Fumio (2008) “Geographical distance center and multivariate analysis of the standard Japanese” *Dialectologia* (Barcelona) I: 65-81.

<http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia1/>

井上史雄 (2009) 『庄内方言地図』 <http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/inoue/LASD目次.htm>

Inoue, Fumio (2010) “Real and Apparent Time Clues to the Speed of Dialect Diffusion” *Dialectologia: revista electrònica*, 5 pp.45-64 web公開

井上史雄 (2011) 『経済言語学論考』 明治書院

Inoue, Fumio (2011) “First Dialectologists Willem A. GROOTAERS” *Dialectologia: revista electrònica*, 7 pp. 157-164.

井上史雄 (2014) 「昭和の方言 鶴岡と郊外の言語変化」 *日本語学*32-15

井上史雄 (2015) 「「お父さん」の記憶時間—グロットグラムによる地域差と年齢差—」 *社会言語科学*18-1 : 128-146

井上史雄 (2016) 『敬語表現の成人後採用 —岡崎における半世紀の変化—』 国立国語研究所

Inoue, Fumio (2016) “A Century of Language Change in Progress — New Dialect in Tsuruoka —” *Dialectologia* 17 web公開
<https://www.raco.cat/index.php/Dialectologia/article/viewFile/312057/402149>

井上史雄編 (2017) 『敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き—』 大修館

井上史雄 (2022) 「敬語の歴史社会言語学—関西起源のテイタダク—をいただく」 滝浦真人・椎名美智『「させていただく」大研究』くろしお

井上史雄・半沢康 (2019) 『庄内浜荻方言地図 Dialect Atlas of Shonai Hamaogi (DASH)』 科研費報告CD-ROM

井上史雄・半沢康 (2021.2) 「方言語彙の地域差と年齢差—庄内浜荻調査2回の多重対応分析—」 『地域創造』32(2): 5-24

井上史雄・半沢康 (2021.4) 「方言衰退の語彙論的過程—庄内浜荻の250年—」 *日本語の研究*17-1: 1-18

- 井上史雄・半沢康 (2021.9) 「方言語彙残存と鉄道交通—『庄内浜荻』の方言語彙残存率—」『社会言語科学』24(1) : 144-156
- Inoue, Fumio & Yasushi Hanzawa (2021.9) “Multivariate Analysis of Geography and Age in Dialect Vocabulary— Comprehensive Analysis of 250 Years of Language Change —” *Dialectologia: revista electrònica* 27 : 97-160
- 井上史雄・半沢康 (2022.2) 「方言の地域差年齢差の多変量解析—庄内浜荻グロットグラムの多重対応分析—」福島大学地域創造33-2: 17-29
- 井上史雄・半沢康 (2022.9) 「方言の地域差から年齢差へ—庄内浜荻追跡調査の多重対応分析—」言語研究162: 63-89
- 井上史雄・半沢康・田辺和子・山下暁美 (2022.1.31) 「「お父さん」の実時間と記憶時間—グロットグラムにおける見かけ時間の認知方言学—」東京外国語大学論集103: 1-29
- Inoue, Fumio, Yasushi Hanzawa, Kazuko Tanabe, Akemi Yamashita (2022.12) “Real time and memory time of “father” — Social and linguistic motivation observed in Glottograms —” *Dialectologia et Geolinguistica* 30: 69-89
- 国立国語研究所 (2007) 『地域社会の言語生活—鶴岡における20年間隔3回の継続調査』国立国語研究所
- 熊谷康雄編 (2013) 『大規模方言データの多角的分析 成果報告書—言語地図と方言談話資料』東京：国立国語研究所
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns* (Philadelphia)
- Labov William (1994) *Principles of Linguistic Change Vol.1 Internal Factors* (Blackwell)
- 渋谷勝己 (1994) 「鶴岡方言のテンスとアスペクト」(国立国語研『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査報告1—』秀英出版)
- 祖父江孝男・須江ひろ子・村上泰治 (1957) 「エジコに関する文化人類学的研究—分布及地域的変異について」人類学雑誌66巻2号
- 徳川宗賢 (1993) 『方言地理学の展開』ひつじ書房
- Trudgill, Peter (1992) *Introducing language and society* (London: Penguin Books).
- Trudgill, Peter (2004) *New-Dialect Formation —The Inevitability of Colonial Englishes* (Oxford)
- 山形県方言研究会 (1970) 『山形県方言辞典』山形県方言辞典刊行会
- 柳村裕 (2017) 「話者の職業による敬語使用の差異と変化：岡崎敬語調査資料の分析」国立国語研究所論集 12: 205-225,
- Yarimizu, Kanetaka (2011) “Language Change from the Viewpoint of Distribution Patterns of Standard Japanese Forms”, Yuji Kawaguchi, Makoto Minegishi, Wolfgang Viereck (eds.) *Corpus-based Analysis and Diachronic Linguistics* pp. 265–284.